

川柳塔

昭和四十一年一月九日印刷
 昭和五十四年八月二十五日印刷
 昭和五十四年九月一日発行（毎月一日発行）
 創刊大正十三年 通卷六二八号



日川協加盟

No. 628

九月号

54年度二賞発表句会と

同人総会

川柳塔社主催

日時 昭和54年10月7日(日)午後一時開場
会場 なにわ会館 大阪市天王寺区石ケ辻町三八一(近鉄上本町六丁目から徒歩三分) 目標近鉄百貨店(電話06・772・1441番(大代表))

▼同人総会は午後2時〜3時30分。(同人総会の案内状は出しませんが役員改選等、出席者によって採決させていただきます)

▼式次第―司会・西田柳宏子―開会の辞・川村好郎―挨拶・中島生々庵(議事)①会計報告・若本多久志②役員改選③事業経過報告・西尾梨④質疑応答―閉会の辞・菊沢小松園。

懇親宴 同会場で4時〜5時(会費三千円) 同人以外の方のご出席歓迎。

▼二賞発表句会は5時50分から。

柳話

中島生々庵

路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題

兄島与呂志選

「地下鉄」

橘高薫風選

「恩師」

若本多久志選

「続く」

西尾梨選

「大声」

席題

費 二題と選者は当日発表(各題三句以内) 五百円。

つめたさに、おいしさをそえて……

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪各店)
京阪モール なんば新川店 虹のまち鹿鳴
中之島サン・ストア 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店



大 阪 ・ な ん ば



省 歸 參 墓

義弟念願の新築完成

父居ませば母居ませばと木の薫り

ラスベガスからの便り嬉しい孫二人

孫夏休みにアメリカ見学旅行

医者嫌いで通す明治の姿なり

判決は薬害と決める高姿勢

同年です告別式で淋しがり

中 島 生 々 庵

七月十八日は、亡父の詳月命日である。九

州佐賀の片田舎に墓参のために、老妻を伴い

帰省した。酷暑は覚悟の上での旅であったが

折りからの九州一円大雨のあとで、案に相違

して爽快な青田風が涼しい。集ってくれた小

学校の同級生10名、年に一度は必ず集ろうと

私の帰省を待ってくれるが、何しろ、明治38

年（日露戦争終戦の歳）に小学校に入学した

80歳すぎた爺さんばあさんばかり、よくも今

日まで生き残ったという感じの口達者揃い。

世話方さんのご苦労も大したもの、しみじ

み思う。ともすれば忘れかけた説り言葉にっ

り込まれて、悪童時代の思い出が懐しい。

ふるさとよその山並を崩すまじ 生々庵

川 柳 塔 九 月 号

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

風の道僕には剣も盾もなし

藤原桜山

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵・表紙直原玉青

墓参帰省

中島生々庵

ぐだめぐ

工藤甲吉

俳風柳多留廿五篇研究

(二六丁)

(26)

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選

水煙抄

川村好郎選

川柳点の会得と紀逸の死 (川柳太平記 16)

東野大八

秀句鑑賞 (同人吟)

黒川紫香

愛染帖

橘高薫風選

書評「続・老いの坂」

菊沢小松園

54年度二賞候補作品中間発表

(28)

ぐだめぐ

工藤甲吉

「ぐだめぐ」は津軽弁である。意味は、くどくどと不平を言うこと。小言を言うこと。繰り言。無益なおしやべりをすること等々。動詞で、その連用形は「ぐだめぎ」となり、名詞としても用いられる。

さて、筆をとると、ひとり自分の中にとじこもって物を思うことが多くなるが、物思うにしても眼界、視界がともに狭くなるのでひとりでに思う世界も狭くなってくる。

それでいて誰かにそれを聞いてもらいたくて、つい、つい「ぐだめぎ」となるのだが、その「ぐだめぎ」は、けっこう自分の慰めにも楽しみにもなる半面、聞く身になれば聞くだけでも大変な場合もあるようである。以上あらかじめご了承願って「ぐだめぐ」。

ところで、私の手元には毎月何冊かの川柳雑誌が送られてくる。今日もまたある柳誌が配達された。この雑誌を出している川柳社は、新鮮な作風で全国の川柳界にその名を知られている、という川柳社である。

ところが、読んでみると、その新鮮な作風とは、解けないクイズのような句を作ること

ハワイだより	前山北海	(43)
物故同人(3)	不二田一三夫	(45)
雅号ぶっちゃけばなし	錦織文子	(51)
初歩教室	本田恵二朗	(48)
大萬川柳「短い」	川村好郎選	(50)
柳界展望		(52)
本社八月句会	(庸佑・整理)	(54)
各地柳壇(佳句地10選)	高杉鬼遊選	(58)
「髪」	津守柳伸選	(46)
「シヨック」	中筋三幸選	(46)
「皺」	月原宵明選	(47)
編集後記	(一三夫・葉子)	(65)

座右の句
速よいかな消えてしまふと火事見舞
私の句
死は不可避枕頭のバラ鮮烈に
(豆 秋)

福 浦 勝 晴

にあるらしく、句の意味がほとんど分らない。理解すべく努力しても頭の悪い私には、どうして不可能に近いものばかり。そのうち眼は痛くなる、頭は痛くなる、で結局、途中からやめてしまった。これもやはり頭の古いせいだろうが、しかし、なにかこれでもいいのかなあという気がしてならない。

兎角、年寄りの思いは生きて来た道に返っていく、といわれるが、川柳はかつて「世界の諷刺詞」「笑の詩」ともいわれて愉しい文学だったはずである。それが近頃、いわゆる川柳らしい川柳や愉しい川柳は「弊復を棄つるがごとし」のありさまである。

今日の日本は、物質至上主義、エゴイズムの氾濫である。少し固執過ぎるようだが、こんな時こそ新鮮な諷刺や、新鮮な笑いをふんだんにふりまくのが川柳文学の一つの使命ではないのだろうか。

ところで九月は「川柳忌」。十数年前、塚越迷亭さん、高須啞三味さん、大木笛我さんの四人で柳翁の墓を詣てたあの日が格別なつかしくなる。お三人ともすでに鬼籍の人となられてしまわれたが、川柳が川柳(翁)の精神からだんだん遠ざかってゆくような最近の傾向をお三人は西方十億土で、どのように思っておられるだろうか、とふと思った。

とにかく総てモノには約束があり、約束は守られねばならぬ。川柳とて例外ではない。ふるくとも僕には仁義礼智信 路郎 以上、老い来りなば……の「ぐだめき」忙し。



若本多久志選

岸和田市 古野ひで

真っ白い花を愛して病んでゐる

姑に素直に染まるいい嫁で

正座して今日の倅かみしめる

ときめきを少し残して老いの坂

ハイハイと別に信念通す老い

蜘蛛でさえ自衛の執念燃やしてゐる

尼崎市 黒川紫香

蔭ばかり歩いて老大ふりむかず

ゴミ取りの車が暑さ掻き寄せる

風向きに立つほど若い血がわかず

夏山を写し湖 生きてゐる

停年の今度は小さい小さい椅子

高槻市 若柳潮花

割箸の匂いで京の普茶料理

拗ねている女が燃える南の灯

夏の夜の水を彩どる戎櫓

失名のままで名句が世にいきる

亡母の灯へまだ露のある萩を切り

わが娘ながらTシャツの胸臆し

五十にしてまだジーンパンを穿く妻よ

子供にも言分がある夏休み

性善説にたつて三度も騙される

どうしようもないが生きねばならず

朝駆けの集金 口紅つけ忘れ

馬の脚でしたと定年悔いも無し

植物図鑑買うて土無き家に住み

ジョンウエーン讃歌テレビは銃の音

薬摺む気持が集う鍼灸院

花粉運ぶそんな重責知らず蝶

玉の輿 乗って職場を唸らせる

出雲市 原 独仙

倉敷市 野田 素身郎

神戸市 酒 どんたく

ゴキブリの疾やさへ妻の手も早い
罪伏せて女 渚に足洗う
吊皮の老いを知りつつ眼を閉じる

堺市 高橋 千万子

流転終る男小さな愛を得て
過去を追う坊っちゃん明日の的がない
隙あつてそこに女の魅力あり
香水へ甘えてみたい日の危険
気のりせぬ話も欲が割って入り

西宮市 藤村 女

ある朝の鏡に弾む風は秋
ポケットに弾む秘密の本を持つ
屈折のところどころにいる女
妙法の灯一筋むねに抱く
ライバルの倒産を聞く秋の風

青森市 工藤 甲吉

捨てられたゴミに愚かな国を見る
札束となると握力負けていず
世の中の舞台を下りて老いはれる
狂ってる世の中にいて狂わされ
朝夕の四弘誓願を昼忘れ

鳥取市 有田 とし江

熱の子へ買った水着が泣いている
留守番の子は人形と寝てしまい
口ぐせはきびしい亡母の愛でした

わらべ唄老いの心も弾んでる
ライバルも老いて張り合うこともなし

八尾市 香川 酔々

万緑の素直な風に逢う峠
野仏も中年頬がまるくなり
善人の卒塔婆も雪に埋もれる
カレーライス食べて見に行く古戦場
老いた坊ちゃん 坊ちゃん列車に乗る

大阪府 中川 滋雀
(松山にて)

働いた汗の雑兵ほど光り
六地藏水子の声を風に聞く
独り寝の旅路の妻を思う雨
領収書日付けを空けた話し合い
月赤く病める都会を眠らせず

鳥取市 小林 由多香

金婚へはくろの位置も知りつくし
脇役も主役と違った汗を拭く
マニキュアの手も延びている特価品
口実をつくる悲しい酒に酔い
泥水もしっかりまるい月を抱き

大阪府 那須 鎮彦

泣きごとを言わない母の人生譜
父の無理 子の無理母の牽引車
「おかあはん」なんと呼んでも味が
母の手を握ると絆太くなる

母の眼が一番好きで嘘言わぬ

平田市 久家 代仕男

退院後の約束もして癌見舞う

青春謳歌出る幕のない老いふたり

朝顔に顔向け出来ぬ朝の悔

苛立ちにこころの弱さふつと恥じ

叱られた言葉の重み噛みしめる

堺市 藤井 一二三

銀婚式(三句)

先きに死なんといてと互いに頼り合い

手を握り耐えた涙も過去のもの

倦怠期ふたりの辞書にない絆

また陰に泣く人もいてビルが建ち

だしぬけに椿悟ったように落ち

宇部市 平田 実男

割烹着が一番似合う妻でよし

ポーナスの枠でブランがちこまり

いいところを見つけて賞めてやる騾

嘘をつく舌がもつれるお人好し

肩の荷がおりて老化が急ピッチ

桜井市 岩本 雀踊子

線路に耳あてると故郷の音がする

焦点に合わすと妻子が居てくれる

悲しみを貯めると鳩尾いたみ出す

振り出しに戻る男の定期券

たかぶりが残る女の耳たぶよ

大阪市 本多 柳志

良心に従い証人嘘をつき

旧姓で呼び合う女の長電話

予知能力虫に劣っている自嘲

小説より奇なる事実は笑えない

マルクスも読んでるらしい子供部屋

和泉市 西岡 洛醉

からませた指倅の熱たぎる

善人で過そう今日の日本晴れ

労働の汗ベランダに白く干す

髪染めて女は明日へ翔ぶ構え

雑草の俺 俺なりの足の跡

泉大津市 村上 春巳

どんくさい蛙無残な轢死体

セールのファイトに負けた判を押す

駅馬車のテーマソングに陽が落ちる

献血のバツジちよっぴりある誇り

雲海を見下す飯の有難さ

兵庫県 辻 文平

嫌煙権妻ひかえめに咳をする

地に還るときのドラマは僕が書く

すぎるには母に昔の袖がない

癌かもと癌の本読む不安

亡母に似るコケシ見付けた善光寺

島根県 小砂白汀

桃咲けば桃生る天を疑わぬ
限りある生命埋める土さがす
絡みつゝ蔦を断つ斧手にあまり
生きてこそあ花の下花の下
彷徨うた跡さえ消せぬ蝸牛

大阪市 江城修史

働いて働きぬいた妻の掌よ
身構える暮しに台詞などいらす
この人とのへだたり受話器置きながら
闘病の道草私の人生譜
妥協して埋めねばならぬ溝をみる

米子市 小西雄々

祈禱料はすめば威勢のよい太鼓
解説者ぐらゐの知識はもつ野球
告白へニヒルな男の目を感じ
マラソンの汗ふき朝の茶をすする
晩酌の追加夫婦にいい話

羽曳野市 榎本吐来

商談を纏める自信のビールつぐ
芽の出来ない生活を星のせいにする
あいまいで逃げ切る肚を読みとられ
真実が逃げそう日記には触れず
拾得の千円財布の隅に蟠る

鳥取市 河村日満

食わず嫌いですパチンコと宝くじ
健康を誇る男の大ジョッキ
すこし胃がもたれる老いの昼の酒
トレーニングウェア父を若うする
上見れば下あり老後満ち足りる

大阪市 川口弘生

ピンチには悪の強さも頼られる
眠られぬ夜の夫婦は底い合う
養生に忘却という杖も持つ
火傷した過去がたわむれ遠ざける
直な毛をちぢらせている夏の夢

岡山県 嘉数千代香

横に振る首をもちたい日もありて
泣いてては駄目とあしたの米をとぐ
色眼鏡はずせば碧い空がある
いさかえば哀し黙せばなお哀し
馬鹿になれ利口になれと天の声

美祿市 安平次弘道

蟬しぐれ入道雲を呼びよせる
茶柱の期待を知らぬティーバッグ
買えば雑魚釣れば宝のように持ち
非常口錆て無事故の日々に慣れ
鬼瓦町の歴史を知っている

大阪府 天正千梢
かび臭い言葉でタクト振っている

主張をころして安全装置の夫をたて
故障したラジオのように母叱言
ゆるぎない支柱母の肩をもみ
たたらふんで沈黙にたえている

米子市 増田竹馬

心頭滅却病苦を詩にすり替える
添削でねらいと違う佳句となり
浮気しに行くとはまさか空の旅
老いてなおロマンとスリル欠さすまい
管理職の匂いゴルフに熱が入り

和歌山市 内芝としよ

無心の児に生き抜く道を教えられ
吊橋に迷う心を試めされる
腹立たしい想いは愛情かも知れぬ
叱る瞳に本当の母を感じとる
しまい風呂明日のプランへ肌が張り

倉吉市 奥谷弘朗

だしぬけにしかも手ぶらで来てよばれ
じわじわと値踏されてる目に合合い
高々と音痴あきれる歌を出し
金婚が来ても初恋まだ残り
ナツメロに吾家の空気丸うなり

岸和田市 清野こう

伴は心素直な子等がいて
マタニTEE廻し合うてる姉妹

ころんでもおこさぬ母にある情
合掌にたかぶる心包み込み
机の奥に秘めた小さなうそ一つ

八尾市 高杉鬼遊

家のない男につらいかたつむり
詫び状を素直に書いて病んでいる
卵から生まれた鳥の親不孝
砂時計砂の流れぬ日が怖い
夜中まで蟻が驚くほど稼ぎ

新宮市 大矢十郎

かぶと虫親の弱身と見栄を知る
争いの庇と知らず燕の巣
平和な世わたくし主義の人ばかり
神さまの裁き忘れた頃に来る
履き易い子の靴同じとこが減り

鳥取県 川崎秋女

巣立たせて夫婦の地図を塗り替える
このチャンスのがせば青春逃げそうで
ライバルの瞳が美しかった受賞の日
健やかに老いたしと思ういちにいさん
イカ乾して海の女の肌の色

松江市 小林孤呂二

エリートは金銀銅の金を射る
ちっばい幸せ手に升酒がある
ためらわず握手おなじ日本人

贅沢なお話ですと横向かれ
宿命もないので平凡なままを選ぶ

寢屋川市

宮尾 あいき

アジサイのみじめ断切る花鋏

梅雨晴間みつけて亡夫の墓掃除

七十の幸いとし子の飯をたく

金の無い母と心の無い娘

七夕へお金が欲しいと書いておこ

竹原市

森井 菁居

虚しさは唯言い勝っただけのこと

苔に寝てひとりじめする苔の私語

聞き流すゆとりを財産だとおもつ

たくましく育ってくれた口答え

夫婦の歩揃い清貧苦にならぬ

鳥取市

林 露杖

消沈の心励ます杉若木

未だ嫁ないのに孫の名考える

灼熱の陽に焼く甲ら夢も熔け

泪涸れ女は白き貝となり

喪に服す佳人の化身か黒揚羽

竹原市

小島 蘭幸

子を抱いた女に声がかけやすし

大ジョッキ絶好調の日が続く

風よ風すべてを土に還すべし

雑踏よ仏の顔を見失なう

日の丸の鉢巻きがもう似合わない

今治市

月原 宵明

ゴルフバッグ昔背のう負うた肩

サラ金の社長が頼む神があり

父と子の距離を縮める酒を酌ぎ

凡人の燈明をあげ香を焚く

焼鳥を出て満ち足りた妻揚子

竹原市

山内 静水

日本に四季ありゆかたの肌ざわり

六十のフアイト明治におだてられ

雷へとうとう降りて来た娘

かくしゃくとして酎の句おとろえず

義理一つ金は天下の廻りもち

竹原市

古谷 節夫

筆もつと愛の炎が燃えそうで

古傷がちくちく痛む葉月の夜

故郷の渚へ童謡口ずさみ

法師蟬寸暇を惜しみ夏の詩

上げ潮に野心を乗せて雑魚の群

和歌山市

野村 太茂津

幻想の世界合歓の花に惚け

灰汁抜きの旅へ人間臭くなり

三振はせぬが二塁あたりでうろたえる

気の減入るニュースに末世を泳いでる

灰汁抜けて素麺流しの味に溶け

大阪市 黒田真砂

駄馬は駄馬なりに張り切る朝の靴
民宿のいろりに母を偲ぶ旅
敏感な女で燃えるものを抱く
燃えるもの秘めた素顔の三面鏡
再会の手の温もりを抱いて寝る

島根県 堀江芳子

子も孫もきた食卓へ蠅もくる
美しい夕陽と思う倅せに
合掌をほどけば自我が動きだす
乾しあげた白さ見ている昼の月
ラッシユアワー人間きしぎし音をたて

東大阪市 竹中綾女

梅雨明けを喜ぶようなさるすべり
鍵かけるうるささを知るひとり者
ひとり居に庭木の多さうらめしい
空蟬の爪は木膚にしがみつき
抜け殻に二度とはいれぬ蟬が鳴く

八尾市 高橋夕花

いちご皿右も左も男の子
天と地の掟に人間うろたえる
梅雨ながく妻の楽譜も乱れがち
凡人の心に朝顔咲き誇る
ギヤマンの壺もけだるく夏になる

岸和田市 高橋操子

着物好きすいすい夏の袋帯
ネクタイの頂きものは気に召さず
銀食器少女はまるい夢えがく
ふるさとはよし兄さんの胸がある
失敗はわたしもあつた嫁の歳

大阪市 河野君子

癪に触るように出来ているゲーム
先見えて未来図塗り変えねばならぬ
衰えを隠すすべなきシャツルック
緑台のうちわ故郷の風となる
花火舞う夏の祭りに逝きし人

大阪市 小出智子

夫にはかわりのない本を積み
宝石売場で私の位置を見失なう
ひとときをキャベツの値段など忘れ
人の世の病院があり寺があり
友達と一緒に齢をとってゆく
(勝山双葉句会)

富田林市 板尾岳人

白い雪母の便りへ入れておく
槍・穂高同じ高さに来て笑う
山小屋の話を聞くと雪になる
山小屋に岳人と書いてある石が
雪景色母という字は書きやすし

大阪市 大坂形水

命取りになる紙片れを握られる

銀行では既に分っていた融手

阪神連勝牧人さんが居たらなあ

冷房に寒いのが立つ浴衣会

と云ってクーラーに弱い暑がり屋

大阪市 不二田 一三夫

自分を捜がしに今日も寄席へ行く

彼奴さえないなけりやーそんな椅子にいる

再会で人妻 三度目は墓で会い

二兎三兎追う若さだけ持ちつづけ

カロリー過多

串カツが当分食えぬ新世界

倉敷市 水粉千翁

人間の重さは笑顔からこぼれ

煩惱の外で花鋏がうごき

ふところの深さへ人を飛び込ませ

雷へもうとつときの顔でなし

西宮市 島居百酒

伊賀上野・蕉翁緑りを訪ね(一句)

無名庵句碑からそよぐ故里の風

猛犬の威風へ野良犬道を変え

新緑に追われた落葉に残る青

週休へ感なし無職の独り酒

富田林市 岩田美代

折々の疵が貌出すむし暑さ

梅雨晴間昨日の悔は乾かない

満願へ地蔵の耳は欠けていた
行く末の話などしてところてん

米子市 林 瑞枝

今度逢う日が楽しみのおもちや箱

スナップのいつしか老母に似る私

マンションにご先祖さまも住み難い

見て貰う為には咲かぬ野辺の花

伊丹市 檜谷寿馬

古稀へ贈る酒に翁の銘撰ぶ

薩摩から焼酎 叔父を連れて来る

ふる里が近し地酒の名が走る

ビヤホール男が小を飲んでいる

島根県 西村早苗

潮騒を不倫は遠い音で聞く

潰された顔が不満を星に投げ

郷愁へ蛙は幼き頃のうた

背に予感走る冷たい受話器取る

松江市 中川晃男

肩書を捨てた名刺のゆとりかな

悲しくもないに涙が老いの坂

絢爛と迎えてくれたは ああ造花

男の色気 力と汗でにじませる

姫路市 梅谿庵 不酔

時々動き団扇も昼寝する

高望み昭和は買わぬ氏素性

停年を椅子に未練は残さない
電算器お前俺よりいい頭

東大阪市 市場 没食子

子煩悩が孫煩悩に移る歳

出盛りの枇杷の色艶梅雨に入る

逢曳の場所に氏神さんを借り

邪しまなこころ写経でためる筆

鳥取市 両川 洋々

予想外だった身内が反旗振る

口実を吐く時心に錆が浮く

神様の気ままへ黒い肌が泣く

背信の気ままへ自虐の酒が沁み

貝塚市 行天 千代

航跡をえがいて海のあざやかさ

慰ぐさめの作り笑いもむなしうて

外孫を急に見たいと思う日も

飛行雲紺碧の空真二つ

橿原市 岩井 本蔭棒

天折へ代る街ない老いの数珠

職変えた先でも冷飯食っている

葬儀店泣かせる声も持つマイク

老人の腰落着かぬ乗車証

姫路市 植村 客遊子

その人の視線まともに思慕たぎる
お見合で多産系やとことわられ

宮仕え花も嵐も四十年
春闘が妥結血圧さがりかけ

大阪市 西田 柳宏子

どっち向いてもチヨボチヨボ背伸び止めとこう

顔面痲痺天与の休みとして素直

点滴をみつめ生命を考える

入院か矢張り年齢やなと悟り

島根県 大森 孝華

四季を降る雨よそれぞれ詩を呼ぶ

頼る影胸の余白に生きつづけ

さりげなく投げたボールの行え追う

いつしかに余生とやらの花ばさみ

倉敷市 藤井 春日

馬子唄が聞こえて来そうな峠道

潮の香を吸うてこの子も漁夫を継ぐ

定退へご苦労さんと云う挽歌

シヨッピンGパン姿の京舞妓

倉敷市 稲田 豊作

抜け駆けの功名目指すとき男

功績へ妬みの視線突き刺さる

身を賭すとは派手な嘘を言う

小心の私を飾る小さい法螺

姫路市 大原 葉香

杖つけば心の杖も欲しうなり
御多幸を祈る手紙を病んで読み

童心に返り笹舟子と遊ぶ
タクト一つ音の世界が整然と

竹原市 時 広 一 路

刺にさされても薔薇憎めない
私にはプラスともなる逆風で
煙幕を張って逃げ道考える
雨が降りそう心の窓も閉めようか

大和郡山市 森 田 カズエ

着想は奇抜であとが続かない
拳玉のコツちゃっかりと孫盗む
陶工の指に呼吸づく土の色
寝袋へ山の空気もつめこまれ

今治市 長 野 文 庫

利子で食う積りへ地球割れる説
美しいネオンが包む夜の嘘
こんなよい時代に昔なつかしむ
母親の願い元気で平凡で

大阪市 室 谷 徹 舟

今日の日を大事に生きよう明日のため
充分に福祉に浸る医者通い
志望校学資を稼ぐ親の汗
一杯のビール幸せしみ渡る

川西市 戸 田 古 方

勝手な奴と照る照る坊主にいわれても
押入れの襖をずらす梅雨の晴れ

解説をされても集中豪雨です
雨傘日傘女は重いとはいわず

東大阪市 斎 藤 三十四

中年の恋は小切手で切れる
いい夫だから出世には遠い
あの世でも夫婦になろうねと誓う
包丁に刺身素直に列つくる

倉敷市 小 幡 里 風

姉さんがいるのに私が所望され
大樹の根隣屋敷も吸うて伸び
この世代見下す位置で杉が伸び
姉さんかむり見て貰い度い顔がある

大阪市 北 勝 美

雨の日も雨なり楽しいものおmoi
倅は心で掴む老の日日
虚勢張る積乱雲のむなしさよ
朝露を踏める倅明日に生き

鳥取県 鈴 木 村 颯 子

凡人の非凡は草に埋もれて
新品の塗箸何も語らない
満開もいいが蕾の未来性
しあわせの足どり髪を染めに行く

島根県 飯 塚 虎 秋

恵まれぬ道のり思い子と思う
あの頃の日めくり刻む遠火花

嘘綴る娘とうとうお前もか
川音に碎ける月に母を見る

鳥取市 岸 本 無 人

カットして襟の暑さを捨てて来る

目のふれぬところに本職目を通し

梅干も漬け終え暑さ一つ越し

すき間風もぬけになった胸をぬけ

京都市 松 川 杜 的

人生の曲り角曲り角に妻が居て

ロッキングチェア一塔の見える窓

(禁煙二句)

あめ玉を切らさずそれからの事務机

心から喜んでくれたのは妻だった

大田市 藤 田 軒太楼

呼鈴を押す指先にある期待

絵日記に画かれた海は澄んでいる

半生に悔なし六十路の曲り角

迷惑は承知と迷惑泣きつかれ

大阪市 太 田 良子

愛 染 祭

浴衣着て袂気になる祭店

諸々の用事かかえて出るも梅雨

達筆は一杯飲んで決まるらし

胃をこわしビールの代りというのをみ

松江市 恒 松 町 紅

一と汗ですまぬ世話役引きうける

新畳へ住んでしみじみ日本人

薄情な色で納税通知来る

舗装してから野地蔵は邪魔にされ

寝屋川市

柴 田 英壬子

ご利益を得た人の掌は深く合い

病氣してからメロン通になり

篝火に鶴は満腹をゆるされぬ

喧騒と汗の祭りへ遠く居る

兵庫県

遠 山 可 住

傘持つて行かぬ若さが残る父

ひまわりが好き昂然と陽に向い

一糸乱れて女に姿なし

男今日勝たねばならぬ背広着る

桜井市

河 合 茂 雄

豚でさえ開き直ると怖くなり

孫あやす私は漫画の顔になり

親馬鹿の十指の中で子を育て

離婚する夫婦で解けぬ方程式

和歌山市

垂 井 千寿子

叱るより褒める効果を知るも年齢

ふん切りを女の業が邪魔をする

夜が好き亡夫に会える夢が好き

茶柱を信じて人を信じない

岡山市

川 端 柳 子

太っ腹今日の苦勞を掃いてすて
くつろぎへ雨のおしゃべりはげし過ぎ

若さとはちがう自信の胸を張り
すこやかなほほえみ花に見詰められ

針千本逃れた夜が寝つかれず
呉市 横田英詩

定年が再出発の名刺刷る

出世せぬ楷書のような気性して
銀婚の妻に指輪のない悔み

米子市 八木千代

ライバルの伸びに心の眼がひらけ

あやまちと知って咎めぬ眼に圧され

武者風の気ままに糸も張り疲れ

狂い咲きしても牡丹は人を寄せ

鳥取市 大塚豊生

育児日記その折々にある折り

健やかな灯です夜学の窓明い

節くれた手に花束がきこちない

口実にするアリバイを頼んどき

三重県 坪田冬花

子も孫も又老人にしてしまい

押し売りにまで赤ちゃんが笑いかけ

化粧して化けた女の嘘に負け

嫌やいやをしても芒きは刈り取られ

竹原市 鈴木かつ子

道草でなかった過去の回り道

傷心を友の便りに支えられ

喋らない目が本当にほめている

肩たたきされて人生たそがれる

大阪府 河井庸佑

裏方を勞う気持常に持ち

人徳が門前市をなすお通夜

ギブアンドテイクルール通りに受けておく

信仰がこんな人に人を変えていく

島根県 藤井明朗

東、西別れの尾燈ぬれて行き

金婚式しみじみ語る夫婦箸

チャンス又逃し運命の自縛

グループの旅らし詠りほとばしる

藤井寺市 児島与呂志

地下鉄刊行(三句)

俺らしい匂いこもって俺の本

こみあげる喜びにんまりひとり読む

手に持てば「地下鉄」頼りになる重さ

欠点の夫をかばう可愛い嘘

松江市 柳楽鶴丸

アジサイが梅雨さんおいでと咲き始め

老婆心から誤解の種をまき

断腸のおもいでライバルへ弔辞読む

残業の妻へ包丁のリズミカル

笠岡市 松本忠三

窓口のベンツながれたままで借り

極道を突き放せないのも親か

一行を残してインク底をつき

お先きにと女房さつさと床に入り

大阪市 西川誓二

自信はとも角当って砕けよう

祝われる当人無心に乳房吸い

躓いてやっと気付いた気の焦り

露天風呂仰げば穂高峰に雪
(新穂高温泉)

大阪市 横地雅風

割り勘に損得かけて二日酔

相談をしようと逃げ場にする主人

冷房車降りるにやもつたない一区

兎小屋それに一生を稼ぎ蜂

和歌山市 津田与史

いい話或る日の足が軽くなる

激動の世に流されている軽さ

正直者が首ひねってる社会面

横文字の本を並べて世にうとく

倉敷市 田垣方大

田植機のそばを農婦の外出着

モデル代要求したい道祖神

裏の貌見抜けず平を抜け出せず

俺ぐらいふんわり乗れそう夏の雲

松江市 梅本登美也

はーたるこいあの頃水は清かった

ある日ふと㊦の文字が喋り出す

花束を胸に下積み長かった

上機嫌父はどの子も抱きあげる

大阪市 本間満津子

白杖の短さ足もと探るだけ

手のひらに鈴ころがしている孤独

子は巢立ちしたらしヒソと軒雀

君と会う刻の流れは短かくて

米子市 石垣花子

野次馬の目付きで災害ニュース見る

先駆者の治水見直すあばれ梅雨

さわやかにサッチャー原稿なぞ要らず

み陀の浄土信じて老母のおさめ札

和歌山市 福本英子

天までも届け我が子のシャボン玉

一鉢のみどりに憩う胃の痛み

母と娘と心の隅にある戦さ

ジーンズで女の裾も忘れさせ

和歌山市 松原寿子

紫陽花よつものる慕情を抱いて欲し

逢い別れ胸に冴えてる温かみ

花言葉壺に想いを投げ入れる

赦される丘越えた日の余情抱く

枚方市 稲葉星斗

星仰ぎ解禁アユの座を占める
安曇川の野アユ小さく夜が明ける
解禁日てのひらほどのアユが釣れ
若アユの走る姿も澄んで見え

鳥取県 金川満春

新築の案内状へさて思案
余生いま瞑想一人で居たい日も
黙ってて判る夫婦で四十年
功成った友は他人の顔で居る

島根県 榊原秀子

妹と背流し合うのも久しぶり
溜息を捨てて壺撰る昨日今日
しらじらしい返事へわけが見当らず
喫茶店のストロー初夏をつれてきた

米子市 佐伯越子

ふる里に気ままに暮す鎌をふり
不治の妻連れて遍路に祈る旅
書き添えた字もたどたどし母の文
なんとなく尼僧も浮いた夕桜

大阪市 神夏磯道子

参道の長さ蟻何匹を踏む
悲しみは風呂で流そう明日がある
短針の自由に動きたい日もあって
名作の余韻乾いた心撫で

守口市 野呂右近

旅靴銘茶忍ばせ老二人
見解の相違と道徳には触れず
片隅に生きても幸嚙みしめる
限界はどこまで人妻握手する

大阪市 神谷凡九郎

眼が覚めた生きてる今日へ叛くまい
雄と雌神の真意に触れてみる
おんな夏生きる喜びかくさない
馬鹿な僕口で悟ったように云う

岡山市 出原敬一

異動期のために揺れだす父的
籐椅子の煙草の焦げに亡父がいる
集金は約束の日を裏切らず
出ず入らずの暮らしを妻は大事がり

島根県 榑みどり

箒目におちる枯葉に詩ひろう
頼杖の母の姿は疲れはて
長梅雨の空と血圧平行線
なにげない出会いゆさぶる亡夫の夢

西宮市 杉浦婦美子

六法全書愛の言葉は見あたらず
ついて行く弱い女の選ぶ道
ふところにセリフを溜めて門くぐる
組み立ててくずしては又苦吟の日

岸和田市 狭間 希久志
風鈴が夕立来るぞとわめきたて

道祖神危ない恋を見た汗

苦勞人豊かな知恵の泉持ち

心打つ素直に詫げる娘の育ち

京都市 都倉 求芽
入歯また着物に順を越されてる

真夏夜に故郷の潮騒耳へ招ぶ

くちなしの匂いをのせて梅雨しぶく

ポケットの鍵に身体を縛られる

▼前号 本人は囁以上の肚を決め

玉野市 小谷 仙山
先ず逃げる事から野犬教えられ

しみじみと麦茶の匂う故郷説

余生まだこれからですと柿植える

好物は冷しそうめん夏をやせ

宝塚市 傍島 静馬
聞かなんでよかった予備校へ行つてはる

新聞の計報に同病相次げり

漫画見るまでこんな大臣知らなんだ

ものぐさが外ではまめによく動き

兵庫県 河原 みのる
米役人までが日曜米づくり

青刈らる稲やからこそなお可愛い

蝶トンボ捕らぬツバメの律義さよ

女系三代爺ちゃんの位置小さすぎ

今治市 越智 一水
雨下駄のおんなへ斜めの雨が降り

夏に灸すえて病いと闘争し

馬鹿になり切つて人間ほめられる

扇風機よりも団扇で夏愛す

鳥取県 福田 保子
一徹な父の猫背にある主張

合格欄私の名前が光ってる

漁夫老いて海の歴史を顔に秘め

口実が浮ばぬ鞆が重すぎる

また延びた寿命に停年追いつけず

仙台市 川村 映輝
孫抱いて母は娘の後につき

明るさを粧い苦難に堪えている

履き馴れた靴脱ぎきれぬ停年期

子連れ猫追えば追われる程強い

大阪市 藤田 頂留子
一とレベル上に挑戦して見よか

騒音にもなれて車道を歩む鳩

坪何万そこでは草がぼうぼうと

窓口で防犯カメラの目に出会い

東大阪市 崎山 美子
テーブルにお菓子とママのメモが待つ

迷いの海もがきつづけている中年

ストレスを背に急勾配を行く中年

和歌山市 若宮武雄

まっすぐに歩く男の靴の疵
安らぎは低いところにある丸さ
ひとの眼をかすめた僕を見た自分
いつの日か籠を脱け出す羽織い

倉敷市 藤原桜山

恩讐のかなたの白さちぎれ雲
ちぎれ雲友の温さを追うて消え
ちぎれ雲消えて輪廻が信じられ
ちぎれ雲追えば遍路の鈴が澄む

京都市 山本規不風

補導されてる児は親を責めてない
休日を取ると神様雨にする
返信に毛穴がよだつよなサラ金
注文が多くて生児の名がつかぬ

東大阪市 萩尾真佐志

「うちの子に限り」は我が家もそう思い
娘の晴着売場で吐息落して来
一票と思えば泥田の手も握り
薬漬け副作用にも又薬

島根県 谷岡芳枝

すじ通し明治女という姿勢
蛭籠小さな夏を持って来る
草笛に心を托すわびしさよ
ふれずとも笑顔を呉れる嫁いとし

和歌山県 吉野富子

謙遜を知らぬ女の重い腰
思い出を語る卒寿の語気若し
底辺の暮して女も大志抱く
撫で肩の男に秘めた闘争心

兵庫県 藤後実男

着こなしはやはり師匠にあるセンス
我が意地を通して左遷の道をいく
肚割って話がはずむ大ジョッキ
エリートが少しはなれている仲間

岸和田市 島崎富志子

CMが夢に拍車をかけてくる
妻の心得ほんの少うし嫉いて置く
手の中に夫と子供の居る安堵
にくい程子供夫に似たしぐさ

和歌山市 西山幸

よい樹にはよい実がなると信じてる
磨かれて言いたいことを言う鏡
めだたない一生タクトなど振れず
心とは違う日ばかり雲流る

島根県 堀江正朗

逆らってあまえて妻の手のなかに
人さまは目のあることをつい忘れ
夜が明けてみんな忘れた顔で起き
想い出を廃品として一つ消し

和歌山市

浦野和子

大阪市

柳原静香

一朝を足りる小皿の茄子の彩
愛憎の谷間で揺れるのも女
地の底の声を飛鳥の石は聞く
古きよき浪華に触れた芝居茶屋

岸和田市

福浦勝晴

松原市

北野久子

古写真気になる亡父のインパネス
嘘と嘘ネオンの下で交錯す

負け犬がやけに可愛い孤独の夜
さりげなく過去を絶ち切る遠花火

大阪市

金井文秋

大東市

土岐トク子

汗のない暮しを墮落だと思ふ
ほころびは小さいうちにといい驥
上を見ろ上を見るなと言いつ聞かせ
反省の余地を黙って聞いておく

竹原市

三宅不朽

島根県

錦織文子

故郷の水が身にしむ胃の渇き
額の亡父臉とじればなお濃うし
雨垂れを大事に見つめ病むベッド
胸にしむ故郷の水よ原爆忌

兵庫県

北山越山

八尾市

宮西弥生

父の日に父無視されて縄のれん
生臭い風も寺から吹いて春
保護色になる政治家の裏話
叱られた犬の白眼が横を向く

妬く種も切れた夫婦のゆるい坂
愚痴言うて言われて母子にある絆
野心みな捨てて青葉の風に佇つ
三面鏡確かな老いを写し出す

ナフタリン役目果たして消えて行き
運命へ素直になれば平和なり
慟哭の心に音が欲しい日日
体調が崩れて夫の愛を知る

スカイラブ天から科学が降ってきた
サミットが終り不安だけ残り
難民が難民でなくなる日の遠し
リフォームで家計の役買って出る

白足袋をぬげば独りの安らぎが
「また来ます」の言葉を胸にためて待ち
薬ぶきへからす安堵の羽根を止め
児の寝顔絵にして心満たしてる

あじさいの彩に闘志だまされる
エスカレーターに列をつくっている無力
生きざまを变えるに通帳軽すぎる
溺れたらあかん友情まだつづく

西宮市

若林草右

サミットへ漫画でなじみの顔が寄り

ピーポーでご入院とはすこし派手

入院も手さぐりという三カ日

三病が見つかり息災遠ざかる

岡山市

直原七面山

夢の無い女と金の無い男

主義主張を捨てて流れに身を任せ

決意した目と目が熱く揃み合い

人間が出来すぎていて煙むがられ

下関市

国弘半休門

松喰い虫山の起伏を喰い散らし

石炭を焚くSLに新魅力

仏具店岐阜提灯から梅雨が明け

スカイラブニートンうそを教えず

大阪市

有信新之助

補育器で自殺の多い世に出され

天照皇大神のときから女は騙されて

九九がときどき狂う老化かな

大阪市

欄蘭

戦々恐々年功序列崩れそう

壁一つ破れず迷う我非力

折りにふれ戦友の死が臉に残る

鳥取県

清水一保

トゲと花持ってサボテン人と和し

功成つて内助は心の中で謝し
人類に地球も愛想つき果たし

松山市

谷真風

ある日ある時凡人指で丸作る

孫の手に運命線も刻ってあり

ゴルフ場甘諸作った頃思う

香川県

岡田拳法

三万もかけて省エネリックとは

自衛隊が清掃しても皆の富士

違法で餓死した検事むかした

寝屋川市

江口度

倦怠期メモとメモとがよくしゃべり

鴨川の魚影いずこにあれば梅雨

外科手術タイヤ取替えふと思つ

大阪市

西森花村

天の川水着の七夕さんはまだ

男性コーラスのようにも聞ける蝦蟇の歌

おむつ更え赤ちゃんの目にいる私

大阪市

津守柳伸

目標に向う女の酒タバコ

健康の好きを確認した見舞

真夜中の作句むなしい走馬燈

出雲市

高橋可保留

まだ省くサイズ残した海水着

醍醐味はこれだと貝飯焚くキャンプ

洗ひ物探して祖母はきれいい好き

堺市 伏見茂美

孤高に嫁し巷の声に息をつぎ

派手に育ち不粹と添うて惹がなく

子育てのママの悲鳴の恐ろしや

橋本市 森脇善太

少年は叱る瞳を愛と読み

霧笛に亡父への思慕が止められぬ

改札機故障しなけりやサボれない

岡山市 時末一灯

長病みへ友一人去り二人去り

抜ける青とんな雲が逃げおくれ

悲喜交々鉄路は今日も軋むだけ

和歌山市 坂口公子

ぬばたまの夜を抱きに來る山の霊

能舞台うぶな私を金縛る

鉄則が無くて足並美しい

海南市 牛尾緑楼

子に譲る性格何もみつからず

湯の宿で小指からめて妻と居る

ボーナスの軽さにもある父の位置

唐津市 新岡回天子

高樓の窓から暮色美しい (マニラ・インドネシア川柳の旅)

整然と墓標並んで異国の地

石の牢今もその儘靈残り

底力負けた御馳走よく覚え

無医村に夜の病氣が神を待ち

ぞくぞくと峠の視野に汗が冷え

熊野市 西久保苔石

無い袖も振らねばならぬお付き合い

暴かれたルーッロマンの夢も消え

省エネがあきれる冷房三ッ揃え

大阪市 神田秀峰

戸締りで終る昨日も一昨日も

傷心の身をたちつくす茜雲

一すじの煙が私を寡婦にした

八尾市 納糸葉

池の水満ちきて菖蒲媚を持つ

五月雨に飽きもせずいる池の鯉

雨の日の水掛け不動みて通る

雨に沈んで山の湯やまの名を付ける

鈍行の一と駅ごとに雨あがる

正本水客

菊作りの熱のさめたる鉢を積む

昔雑喉場ありけり大鳥居

そそっかしいのも養子さんという氣受け

宿浴衣女の腰はくびれそう

パジャマにもポケットがあり何入れる

西尾 栞

浜田 久米雄

浴衣着てすらすらのが言えてくる

死ぬるまで欲の塊だと言われ

正直な男に秘密などはない

猫の恋薄笑いして聞き流し

坊さんの別の勤めもして暮し

本 田 恵二朗

適材が適所に坐った頼もしさ

共有のころ仲良く温め合い

建前を生かす本音に力込め

前向きの姿勢で男青く炎え

学の無い父だが生活力を持ち

菊 沢 小松園

流れ星他人になれる言葉持つ

冷戦のチャンスチャンスをやり過ごし

欺まされた同士で飲んでる新世界

揺れるものみな動かして風過ぎる

これが川柳の真髓!

作句する前にまず一読を

川柳全集 ② 橘高薫風編

「麻生路郎」

定価 千円
送料一六〇円

発行所 構造社出版株式会社

夫婦とはこんなな退屈なものかいな

決断をせまり煙草も喫わせない

何げなく仕草の妻に老いを見る

保護色で生きる女のそっけなく

七十年の遍歴歯がゆいことばかり

根負けをするのは男 電話する

路 郎 忌 (三句)

路郎選集校正しおり路郎忌に

路郎忌のわれよき友と旅にあり

路郎忌は水も白い炎かな

壁鏡にうつし自画像誕生日

伊 藤 茶 仏

そんなとき一人でいたいちぎれ雲

頭からくさすころの愚を叱る

墨すってから雑用に狩り出され

深呼吸から一日が走り出す

老碌をしたなと思うお人好し

若 本 多久志

忘れ去る中で売り声のわらび餅

おだてられ米寿までは欲もでる

八十年代 五七五でえじやないか

嘘言わぬ孫 政治家にやなれぬやろ

今日のことは今日中にと思ふ齢

川 村 好 郎

橘 高 薫 風

川柳 太平記 (16)

川柳点の会得と紀逸の死

東 野 太 八

谷口蕪村（正徳五年一七一五—一八三）は、大坂近郊の毛馬村（現都島区毛馬町）に出生、享保の末、仮名詩ブームにわく江戸に下った。この孤独な青年を拾い育てたのは、江戸座の早野巴人（夜半亭のち末阿と改号）である。

青年蕪村はこの夜半亭で薪水の労をとり、師の片腕となって活躍した。この師弟の出会いこそ中興俳壇の光を掲げたのである。

やがて恩師の死にあい、低俗な江戸俳壇に絶望した蕪村は、江戸座を脱け京に向うが、その旅で三十歳の彼は下総結城で「北寿老仙をいたむ」寛政五年刊「いそのはな」を作った。日本文学史空前といわれた自由詩である。後年、藤村・朔太郎が、明治の新体詩を抜きんずる高い抒情精神と証言した、この革新的

な詩は中興俳諧のシンボルとなった。この蕪村の発想と形式は画期的なもので仮名詩と次元を異にしたものだが、だからといって江戸座の仮名詩を否定することはできないであらう。

ある俳書の蕪村研究によると、慶紀逸の放鳥辞（宝暦四年刊「雑話抄」）は、仮名詩の情歌歌謡として俳書中にも記録されていないものの、元文六年の「平河文庫」には各様の彼独得のスタイルが残されている。その作品は「もう一步前進すれば、北寿老仙を悼む」に迫るものが生れていたかもしれないとある。

額原退蔵博士は「春風馬堤曲の源流」（創元選書「蕪村」所収）においてかく記す。

「実は夙く享保・元文の頃から、江戸の俳

人の間に仮名詩とは別種な一種の韻文が行われて居た」とされ、紀逸・桜川・尾谷・文喬等の作品に「北寿老仙をいたむ」と共通する自由にしてローマン的な抒情詩が見出されたと記されているのは注目されてよい。（文人画家であり漢詩人としての蕪村については後述の蓼太関連について再度ふれよう）

紀逸門を去った太祇は、同じ江戸座脱出の蕪村と京において肝胆相照らす俳友以上の親密な交友に入る。蕪村は有名な俳体詩「春風馬堤曲」の結句にこう記しているほどだ。

「君みずや故人太祇が句 藪入りの寝るやひとりの親のそば」

太祇は島原の廓内に不夜庵を営み、俳三味の簡素な独身生活を送り、俳壇の野心を一切持たず、恬淡温雅らいらくな性格をそのまま悠々自適の境地に安んじ六十三歳で他界した。蕪村が生涯心を許した俳人は、この太祇と黒柳召波の二人だけといってよい。召波は四十五歳の若さで病没するが、蕪村は彼の死に、「わが俳諧西せり」と痛嘆した。蕪村には陶淵明の影響が認められたが、この自家薬籠化した作品の発想は、召波によるところが大大であった。

紀逸は四時庵、倚柱子、短長齋、硯田舎等

を武玉川誌に用いていたが、生家の幕府御用の鑄物師であるところから、椎名家四代目兵庫（紀逸の父）が、宝暦の始め麴町一丁目三百三十三坪の家領に預り転居した。紀逸は転居後の跡屋敷を榎家として、点者生活を送ったらしい。武玉川十編に井正程画と題した紀逸像が載っている。

「燕都技折」と題して、武玉川全部の後篇に備へ侍らん志は侍れども、老契はかりがたしされば此序に高貴の方 予が像を画有年

先哲是がうへに賛を添て、見ぬ人のかたみにもと送らせ給ふを 固辞するに及ず、そのまにさし置侍るも 私ならねばそのをこがましきを人々見ゆるし給へかとしかいふ」とある。その画像は、一見円い頭に僧俗体、片膝たてて扇子を右膝に置く。これが往時の

点者の風態であつたらしい。いかにも円満洒脱の風流スケッチである。この年は宝暦六年だから彼の死去する五年前のことである。

彼は享保十八年（一七三三）深川老鼠の義理の子永機が、二世湖十襲名披露の万句合興行の際、祇空の縁故と、その湖十の紹介になり其角座の判者として一本だちしている。この十七年後に武玉川を刊行している。

往時は三十人におよぶ俳諧点者が存在し、

にわか選者の彼は大いに売り出しに苦勞したらしいが、右画像にある「高貴の方」とは、幕府御用の鍛冶職という家柄からする余徳のよう思われる。

とにかく武玉川は、点者資格を得てのち、支考流の仮名詞に没頭し、どうやらそれに円熟した時点で、世間の俳諧流行のきざしを見極め、組む書肆とのきん味もあつて、十七年の歳月をやむを得ず経験したとみるべきであろう。仕切り十分の発刊と推察できる。

紀逸が点者になった時点で柄井川柳は十六歳。「武玉川」初篇刊行の時点で川柳は三十三歳、その三年後に出た「武玉川」六篇の序につきのように紀逸は述べている。

「俳諧は、こと更に句毎に曲あつて興おもてとなきでは、俳諧の本意に叶うべからず、さればとて又あながち俗談平語のみならんもいやし、雅にして興たるべし、景情を示とすべきにや付合の事第一なり、もつとも前句はなれて工案する事はなき物なれば、おのづから付かぬと言う句はあらねども、其付方前句の体と用とをよく勘弁して付事要也

人か碇かともどんぶり

深更にあやしき物音は舟盗人と前句を見て
熊坂が長刀とても盗み物

と付たり。是盗人と前句の魂へ付て置て、さて一句の曲節思ふ儘に作りたるはたらき、推してしらるべし。只付る事のみ専らにすれば一句前からみてはたられぬものなり、さてその付物をよせて句を仕たてたる晋子の妙、誠に仰ぐべし」

柄井川柳がいわゆる「川柳点」と称する一句建て創始のヒントは、まさにこの序文にあつたとみてよい。彼が三十八歳で漸く家督を相続し、そのゆとりをもつて、宝暦七年川柳評万句合の興行を行った事実を思ふとき、この武玉川初篇からの四年はまさに当を得た研修期間だと推定できる。

紀逸には「童的」「種卸し」等多くの著書があるが、その「黄昏日記」は死の直前の筆である。紀逸は、武玉川を燕都技折と改題する十一篇（宝暦七年）後は、自ら老衰を自覚し翌年秋から、起居の自由を失ひ寝たきり老人となり、その後の燕都技折（武玉川通算十三、十四篇）は、門下生の編集で、ついに宝暦十一巳年六十八歳をもって永眠した。下谷谷中の竜泉寺に葬られたが、辞世は紀逸に不似合な次の狂歌であつた。

此として始めてお目にかかるとは

弥陀に向つて申訊なし

俳句研究

— (二六丁) —



青木迷朗

460 丈四尺くらいにつもる秋の雪

八木—吉原八朔白無垢の句であらう。お針が白無垢を縫っている所であらうか。次の句が参考になる。

秋の雪四尺に積るお針部屋 七八・13

四尺は着物の身丈を暗示し、同時に反物が四尺位の高さに高く沢山積んである、という意味にもかけているのであらう。

青木—賛、裁縫のことについてはよく解らないが「丈ヶ四尺」は「着丈四尺」のことではなからうか。

西原—賛、白無垢の経費も四両くらいではなかつたか。

入江—賛。

朔日の雪物さしてつもる也

三〇・14

「つもる」は積ると計る。

岡田—「つもる」は入江説の通り。遊女の白無垢の寸法の概算を、丈ヶ四尺としたのです。いうまでもなく、それに雪の積もるを掛けてある。

461 まん座の中で色文を書いて居る

八木—吉原張見世の牀であらう。

文などを書いて居るをあげべからず

拾七・29

すががきに合せてめめずのたくらせ

拾七・22

西原—賛、普通、恋文は人目をしのんで書くのだが。

室山—礎稿プラス西原説賛。

清—同。西原氏の追加、適切。

岡田—同。

462 お妾のすすめて銀のちろり出来

八木—「ちろり」は、銅や錫のたたき目のある打出し製の器で、専ら酒の燗に用いられる。障な居酒屋つらりとちろりをかけ

卷三・1

銀のチロリとは、大そうなぜいたくである。お妾のすすめて、「わたし、銀のチロリが欲しいわ」というような具合で、銀のチロリが出来た、ということであらうか。

西原—賛、かねめのものを作らせたり、集めさせたりしておくのが、妾の作戦なのだ。

鈴木一賛。現代版なら、さしずめ数カラットもするダイヤの指輪。

岡田一賛。

463 なムばいにしろてハ雪に齒がたたず

八木一鯉の句であらう。

鯉は、雪が降ると急に高くなる。魚屋にお金を出して、「何杯」何匹よこせ」などといつても、とっても商談成立せず、というようなことであらう。イカは今も「何バイ」と数えるが、当時フグもそう数えたのであらう。

雪の鉄包値を聞いてびっくりし

七六・19

岡田一 原本読みにくく、「齒がたらす」とも読めるが、「齒がたたず」が正し。一人が「何バイにしろよ」なっているのも高く、とても買えぬ。

464 吹からを跡から拾ふうらゝかさ

八木一 野街道のスケッチ句であらう。野街道では、意外とタバコの火には困ったようである。

すい付けてけむをいたくのがけ道

野かけ道畔をゆづつて火を借る

二・20

野かけ道家をさがして火をかりる

二八・8

室山一 同。昔はよかった。

三三・27

岡田一 同。どうも、ライターなんて便利なもののない時代の方が、生活に情趣があった。

465 笑ひ過して鬼灯を嫁なくし

八木一 嫁、新婚の嫁。娘気分がまだ抜け切っていない。ホウズキなんかくわえてみたり、又よく笑うのである。もっと世帯じみて来ると、こんな句には当てはまらなくなる。

余り笑い過ぎて、口にくわえていたホウズキをなくしてしまった、というのである。どこかへ飛び出したのか、間違えて吞み込んでしまったのか。

室山一 賛。娘気分の抜けぬ嫁。

岡田一 付言すれば、ホウズキを鳴らすために口の中に入れていた場合。

466 二階口までほうづきが鳴て来る

八木一 吉原売の句。売はほうづきが大好きである。

ほうづきハ売へはさむ水さかな

ほうづきを口から出して間イをする

四・19

ほうづきをはき出し売返事する

傍四・10

吉原の妓楼では、客を通して遊興する部屋は二階にある。階下でほうづきを鳴らしている分には構わないが、二階の客室近くでやっていると遣り手等に怒られるかも知れない。二階口がその意味で効いてくる。階段を上り切ったら止めるのであらう。

青木一 売説、賛。

十ざしを売おきると出して見る

八・26

(十ざしハほうづき)

岡田一 同。

467 はがき吹ちる古市の三会目

八木一 吉原では床花といい、三会目に二兩位をおいらんに渡したが、古市では所柄「はがき」を使う。紙だから吹き散る、と表現した句作であらう。

室山一 同。近頃は、古市のかわりに「国際秘宝館」なるものがあり、いろいろと趣向をこらしてある由。

岡田一 賛。

二・18

路郎賞
川柳塔賞
候補作品中間発表

自 五十四年 五月 号
至 五十四年 八月 号

路郎賞候補作品

若本多久志

(到着順)

み仏の微笑み消えず雨しとど
一隅にまだ日本は亡びない
まだ炎える火種をさせる薄化粧
札束よ 正義は君に譲れない
陽の落ちる果は浄土か妻遠し
絵馬に血がにじんで見える願い事
一期一会 今日満開の花の下
ふるさと人の情に水は澄み
香焚いて自分の心に言い聞かす
運のない男不運を口にせず
この角を曲れば幸せありそう
ふるさととはまた唄があり手で植える
梅の壺三つならべて満ち足りる
寄り添って小さな野菊は群れて咲く
話題ふと途切れて夫婦雨を聞く
川村好郎
仰ぎ見るひとりひとりのさつきはれ 水粉千翁
妍嬢う牡丹の色は白に尽き 林 露杖

前を行く夫が見えぬ通り雨
爪をとぐ女の敵は女なの
慟哭の友に自分を見てしまふ
人形になりさる苦しみだつてある
伏せて置くレターは胸にコピする
息切れの坂に兎をふり向かず
本気になって己を叱つてす
十年を区切りに愛を確める
ごきぶりの殉死笑えぬ店仕舞い
寂しさを見せたりしないりんこの芯
川端 柳子
谷垣 史好
福本 英子
高橋夕花
松原寿子
中川 滋雀
天正 千梢
高田 博泉
藤田頂留子
高杉 鬼遊
腰据えていつそ病と仲よしに 故西 いわを
寂しさを見せたりしないりんこの芯
よくできる子で鉛筆を大事がる
ハネムーン落ち着いた顔で娘は帰り
一つふひとつぶの苺に春がつまってる
ひとり旅 峠へ続くまた峠
喪の家で一際匂う沈丁花
自殺等すまいいびきにはつとずる
都倉 求芽
大森 孝華
松川 杜的
植村各遊子
原田 明春

正本水客

西尾 葉

美術館 無聊に在す阿弥陀さま
子の画いた向日葵母の顔をもつ
眠りたいときに眠って妻老いる
どこに傘忘れてきたか梅雨に入り
旧街道の松はボソボソひとり言
忙しさ作って淋しさ堪えている
たかがゴキブリへ力が入り過ぎ
田垣 方大
若宮 武雄
不田二三夫
小西 雄々
森田カズエ
村上 春巳
小林孤呂二
神夏磯道子
黒田 真砂
本多 柳志
横田 英詩
川村 映輝
野田素身郎
阿萬 萬的
竹中 綾女
平田 実男
慰勉な言葉で兄弟不仲です
明日という字を明るい日と読もう
マナーで食うなんと不味いものばかり
感謝料で育てる子供は食べきかり
缶詰の図柄にまんまと乗せられる
ナメクジへ憎さの高で塩を盛り
人間は数に騎れる癖を持ち
親をみる約束手形持ったまま
わしの孫なら二つ三つひっぱたく

有信新之助
胸上げて公約スツカリ忘れたり
姉婿と逃げた過去あり養老院
縫うための針欠くための針も持ち
原 独仙

時末 一灯
警察手帖ゆつくり見せては絵にならず
大矢 十郎

柳丸 鶴丸
エリートコース片輪になる運命
金縛りの術を自分にかけていた
谷 真風

橘 高 薫 風

八木 千代
桃の灯よ内裏の朱唇ふつと開き
どの眼にも川が流れる石仏
三宅 不朽
歲月が今日のスーブの味に溶け
よくできる子で鉛筆を大事がる
植村客遊子
銀髪になつたら着たい色があり
本間満津子
追われてるとききの男が満ち足りる

辻 文平
定退日社長は明日の顔をもち
四季の花咲かせ一軒立退かず
北 勝美
新入社可愛い財布持っている
黒川 紫香
財布には入れぬ拾った百円貨
川口 弘生
労働歌しかし男の手は白い
大矢 十郎
手の砂がこぼれるように亡夫の事
高橋千子子
垂井千寿子
再開へ日傘の中ふたごころ
河野 君子

菊 沢 小 松 園

若柳 潮花
草に寝て眼はふるさとの雲を追つ
チャンとした理由があつて昼の酒

恒松 町紅
人形になりきる苦しみだつてある

高橋 夕花
人柄が箸のあげさげから解り
奥谷 弘朗
機嫌よく動く機械の油さし
那須 鎮彦
温室で花の生理がまた狂い
両川 洋々
うなすいて女が落すため涙
中村ゆきを

藤井 一二三
回り椅子今日が最後の音で軋む
盲人の妻が泣いたら明日がこぬ
堀江 芳子
見返してやるには低い貯金高
月原 宵明
あゝノルマ花は私を置いて行く
柴田恵美子
座蒲団を拝辞言わせてもらいます

山内 静水
頂点の風は冷たいものと知る
嘉数千代香
氣持よく飲んでくれる飲まし甲斐
村上 春巳
距離おいてじつと見守る愛もあり
浦野 和子

川 柳 塔 賞 候 補 作 品

戸 田 古 方

辻 式
丸すぎて軽すぎて毬転がされ
敗け大にしては素的な日向はこ
津山 刀水
手をつなぐ二人絵になる春の土手
中森葉土人
また種確かに土を持ち上げる
高田てまり
デッサンのままで人生忙しい
和井 観洋
太陽に目鼻を書けば母の顔
岩田 三和
孫の歯をのぞく茶の間の笑い声
野口 美世

立床 晴風
箱庭へ永住する気が雨蛙
窓際の堅い机の先きがみえ
大垣たもつ
行方不明になりたいような春かすみ
平井 露芳

黒 川 紫 香

岩本 寛子
あとおしの妻のヒップがまんまるい
竹内花代子
当然の躰を母はためるうて
横へ来て座る好意をもてあまし
和井 観洋
パンザイをすられ積木が崩れ落ち
津山 刀水
合掌の手に離れぬ欲があり
園山 栄
捨てられてすすく伸びる苗もあり
北浜 二郎
席蹴つて帰る夜が長すぎる
矢野 佳雲
いつ来るか知れない孫のおもちゃ買つ

中谷 利美
灯籠は肩寄せ合つて流れけり
池田香珠夫
いい女だから波紋がからみ合つ
有働 芳仙
信すれば鈴が心に触れて鳴る
玉木志恵子
朝顔の双葉出揃う朝を出る
松川 芳子

大 坂 形 水

江副二牛
触れ合いが欲しい鍵つ子石を蹴る
岩田 三和
太陽に目鼻を書けば母の顔
竹内花代子
雑談のなかで値踏みされていた
矢野 佳雲
好きならば嫁けと最大限譲歩
池田香珠夫
意外にも社運を伸ばす未亡人
大垣たもつ
壇家には済まぬ給料取りになり
浜本久仁於
生活が服の裏まで滲み出る
氏林 洋敏
臨月の妻にこまごま注意され
飛びついてからをどうする青蛙
桑田 静子
レモンしなびて主のいない二、三日
高杉 千歩

水煙抄

川村好郎選

旭川市 朝倉大柏

ぞんざいな言葉で夫婦らしくいる
土を踏む足は故郷を喋りだし
米を研ぎ葱切るそれに満ち足りる
言訳のめじめさ雨に濡れて出る
閉じた眼のあくまで消せぬ挫折感

福山市 桑田静子

天守閣ビルの高さにたじろかず
この石も修羅で引いたか葦陽城
定年も恩給もなし内仕事
わがままな母に勿体ない子を給い
一段落つけた背伸びの素晴らしさ

和歌山県 天満三千代

蛙鳴く減反田の歎きかも
過去捨てて夫婦レールにしかと乗る
悔のない一日夫の寝息聞く
追われてるそれが励みの日々に生き

富田林市 大道美乙女

遇然に見せかけて待つ散歩道
読みかける亡夫との愛を包む文
実印を握る女房にソツがない
金婚間近いたわりの日々丸し

島根県 松本文子

子は宝 宝を守る鞭もいる
知らぬ間に口裂け女が内に住む
つまり母の哀しみ受け止める
いつの日も人形の眼は語らない

八尾市 高杉千歩

想念の浮ばぬままにバラは枯れ
スケッチの汗でばかした三輪の森
人、車、怒号、驕声、夏の海
煙草吸う指が失恋物語る

三重県 川上富子

マニキュアの指で研がれて米は死ぬ

水中花コップの幅という自由
紙ヒコーキせめて子の目の届くまで
やじろべえ親子四人の心の中

鳥取県 和井親洋

里ごころ付いたら私が負け犬か
誉めておくだけならメッキも怒るまい
十字架を私だけが負うなら重い

呉市 山根里香

童心にかえると虹が渡れそう
たわむれの愛の小舟は櫓がきしみ
燃えつきたバラはネオンの隅で生き

富田林市 中村優

腕組んで父権を少し取り戻す
年金の算術だけは無理に解く
愚かなる捨身を笑う郷里の風

鳥根県 星野侑正

つり皮を二つ握って耐えんとす
賢妻でなかった妻でつつがなし
一人芝居女房とくくに見抜いてい

尼崎市 中谷利美

長針の目に短針のなまけもの
年金の生活に痛い慶弔費
退職金いつまで保つか物価高

アラビアのクシャミ一つで値が上り
高槻市 大垣たもつ

昼間からテレビゲームをする暗さ
宿題が父に解けないから叱り

熊本市 北川一進

キット来るその一言を待つデイト
自信ある声カラオケの御常連
今昔の違い財布は女持ち

鳥根県 角耕草

水鶏鳴き妻が屈ける舟弁当
こども等は奇数西瓜を切りそこね
外孫のほうの手火花よく弾け

米子市 野口美世

病む妻に夕餉のメモを預けられ
前歴を買われて老いの職が待ち
若き日の癖まで消えた老父の肩

羽咋市 三宅ろ亭

真珠湾アリゾナ館に冥黙す
(ハワイの旅)
土産もののどれにしようか免税店
巾の効く円で買いたいもの帰途迫る

大阪府 溝渕美紀子

売る方が気兼ねするよな価格です
スナップの中に乙女の儘で居り
打ち明けて傷口深くなるばかり

兵庫県 野々口ゆう也

この足はあの世も歩く鍛えねば
老かまだ暮らしの音に耳をたて

妻の運夫次第と言いたそう

八尾市

田中紀美代

熱の子にお灸すえられたなと思ひ

しょっぱさが溶けて夫婦に味がある

確かなる母の足跡追つてゆく

羽曳野市

麻野秋畝

灯を消せば闇が苦痛を深くする

もう一と花咲かせと跳ねる心電図

足腰を練え補聴器離さない

和歌山市

堀端三男

逢った日の余韻五月雨気にならず

時効ない心の責をどう癒す

石油危機節約の二字生き返り

広島市

光井みほ

ガラス拭く心のシミが取れなくて

平和公園にて

原爆の街でドームの砂利哀し

散策の公園にある風の私語

浜田市

佐々木裕

サミットの陰で泣いているニュース

ダイヤルの指のリズムは愛の鈴

夏やせの妻のうなしのネックレス

大和高田市

岸本豊平次

振り向けば親の足跡踏んでる子

播いたなら芽が出るものと決まらない

くちなしの白が緑を濃くする

岡山市

砂田静佳

看病の母に弱気はみじんもない

足だけは自信があります過疎に住む

家族皆眠って妻は今日を消す

枚方市

栗林光夫

小さな親切大きなお世話に受取られ

花火より夫の素顔が美しい

世の雑音入らぬ補聴器が欲しい

吹田市

藤原世史春

大型のわいろ五億と値が決まり

庭の花分けあうむかしの隣組

自転車に駅の玄関占拠され

寝屋川市

高田てまり

夕顔の白さへ無垢の目でありたい

夏休み脱け殻だけが残ってる

松江市

竹内寿美

偶然の出逢いと言う事にして

水虫だけ貰って亡夫の十七年

米子市

青戸美佐

謙虚謙虚言いきかせつつ道歩む

あじさいの色香にまどう蝶もあり

豊中市

満仲きく子

人ごとやおまへんしのびよる孤独

角度変えて見たら世の中オモロウテ

風呂の水気にしながらの立ち話
米子市 三戸 静絵

亡夫の祈りを胸に今日も生く

高槻市 竹内 花代子

仏壇のユリ命日が済んで咲き

父の日はすっからかと忘れられ

大阪市 本多 俊子

平凡なくらしに増える植木鉢

祈ることもない氏神を通りすぎ

倉敷市 中島 彩平

不快指数捻子の弛んだ時計鳴る

掌を握るだけのデイトで又楽し

愛知県 池田 香珠夫

登りつめたでで虫これからどうするか

冠を解けば鶴匠の若い顔

岡山県 池田 半仙

真実を抱いているから耐えられる

重宝な言葉が逃げの手を使う

名古屋市長 越村 枯梢

喪服脱いでいつから女に戻ろうか

蹴られても斬られてもゆく男坂

出雲市 園山 多賀子

さりげない言葉にチラと本音見せ

心満ち虹は明日につづく彩

鳥取市 中森 葉士人

反応をたしかめたくて握手する
苦虫の顔があぐらのままで待ち

寝屋川市 福富 隆子

お炊事をさぼって省エネルギーとは

母逝きし年が私にあと二年

鳥取県 羽津川 貴之

目に物を云わせて口は一文子

夫婦です人には見せぬかくし味

尼崎市 中辻 千子

頼まれた手紙一日持ち歩き

梅漬けてホッと安堵の昼下り

寝屋川市 小林 鯛牙子

教へ子に乙女心を教えられ

レース編む傍にあなたがいる未来

八戸市 島田 昭治

靴までも妻の好みを履かされる

お国入り眼が開く間もなし総理どの

西宮市 山田 喜代子

淋しさは老を知る事一つずつ

姑の嘆きを友に聞くつらさ

大阪市 平井 露芳

減反へ蛙も住居狭められ

スカイラブ地球びくびくさせて落ち

大阪市 堀口 欣一

明日という日がないでなし寝るとする

剃髪をしても瀬戸内晴美なり

米子市 野坂 なみ

温顔の師に口実を云いそびれ

前触れもない子の帰省うれしそう

岡山県 岩道 博友

お気軽にと言うから秘密つい洩らし

稲作の神事予算の事でもめ

羽島市 時田 誠一

有名でないが故郷の盆踊り

人間の都合で犬の繋がる

出雲市 吉岡 きみえ

子育てを終えた乳房はつめたくて

お互いに過去にはふれぬ思いやり

米子市 桑原 伊都

も一枚重ね着をして老いの旅

育児書の標準どりのぞいた歯

竹原市 古田 寛子

腹の子に何を聞かそう曲をよる

胎動よ私も負けてなるものか

今治市 和田 宏

リボビタンDで頑張る決算期

クーラーへ他人行儀の扇風機

東子市 小山 悠泉

甘えぐせつけて帰った里帰り

雨と風ダブルパンチに泣いた旅

騙される話甘さがひそんでる
老いてまだ潤滑油にもなる母であり

京都市 松川 芳子

忍ぶだけ忍び桂馬は身構える

苦も楽も皺におさめて円い古稀

唐津市 田口 虹汀

自家菜園種苗代は稼ぎかね

山里は省エネルギーなど要らぬ

唐津市 浜本 義美

呑みこめばよかった刺のある言葉

献金と言うて政治家太平記

唐津市 山下 勝一

道しるべ嬉し心の傷癒える

沈む夜の自問自答へ星が降る

岡山市 串田 句味地

思い出にまだ鼓動する老いの坂

老いの部屋いつでも同じ花がある

東広島市 石井 さわ子

一片のレモンが愛の鎖つけ

美しい嘘は天命知ると言う

島根県 山本 博也

小粒と云うひけめ背負って日が暮れる

泣き言を己れは無罪のように言い

岡山市 花田 たけ志

天候の気まま薄着のすきを突き

ブランコがゆれてるゆれてる妻の愛

しんどいと言わず登れと坂の石

嘘少しまぜると味よい話し種

良心を売らぬ男の遠い道

往復の躰は生のあかしかも

四捨五入いつも私は捨てられる

雨止むも終生母の傘を出す

苦勞せずに来た定年と思われて

相槌の欲しい男の無頓着

方向が見えぬボタンは渡されぬ

五十年柱時計は鳴りつづけ

親友の苦言にこもる暖かさ

退院が近く入院費で悩む

じわじわと寂しさつのる形見分け

刻まれた皺に不幸の罪詫びる

孫連れが手伝に来て守りさされ

尺八の音色師匠についていず

入歯して追分吹いて見たい欲

一寸声かければいいと云うお義理

老醜の背のび忘れて日々達者

親指を四人でしっかり握りしめ

逢えた日は言葉はいらぬ手の温み

弁当を包んだ新聞読み直し

教え子の言葉の中にある温み

兵庫縣 中田 白 李

倉吉市 野 中 御 前

大阪府 田 口 なりこ

大阪府 高 光 行 有

小松市 馬 場 魚 山

倉吉市 一 風 庵

島根縣 園 山 栄

呉 市 玉 木 志 恵 子

島根縣 岩 田 三 和

大阪府 野 田 君 枝

倉敷市 大 森 登 竜

岸和田市 原 大 森 登 竜

熊本市 有 働 芳 仙

妥協したところから風が吹き初め

寝屋川市

立床晴風

ネクタイも二枚目意識してる柄

鳥取県

石井雅水

もてあます暇のないのも幸の中

諫早市

江副二牛

展覧会無名を拾う大家の目

川西市

氏林洋敏

スケジュール子供がきめる夏休み

竹原市

古田鈍舟

スランプはわが道程の示標かも

岡山市

井上柳五郎

マネキンの肌も涼しげゆかた展

羽島市

伊藤静枝

大切な客であるのに犬が吠え

出雲市

石倉芙佐子

ここからは追って行けない母の道

島根県

木村はじめ

紫の毛布が届く古稀祝う

鳥取市

武田帆雀

遊ぶ子のダンブ内職に乗り上げる

唐津市

桑原掬治

亡び行く野鳥に雀無関心

青森県

波ただお

俺に似て柱時計も遅れがち

大阪市

白石潔

節高な男の指が語るもの

大阪市

石井多可子

突き上ぐる涙もなくして独り住む

鳥取県

加藤茶人

嫁の座が似合うエプロン白く着る

青森県

五十嵐操史

慾望に魅せられ才能反古にする

豊中市

田中善四郎

働いた汗をビールにいたわられ

大阪市

藤森小雅子

一片の紙切れ単身赴任という辞令

東大阪市

三宅哲夫

石油湧く井戸があつたらなんと企業

★

大洲市

米沢曉明

新築のよき風鈴の音のよさ

ありていに言えば味方が減りそうな

年季とはこんなに長い鉋屑

本片はクーラー支所は扇風機

棟梁の腕を盗んでほめられる

岐阜県

市川鱈魚

叱る日の風 父となり母となり

仕合せに振る御詠歌の鈴はない

株の値が読めぬ店 職の座がもうい

地獄風呂貧しき里の花菖蒲

流れ星すんなり別れだった酒

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

黒川 紫香

ありがたい母へ感謝が口に出ず

遠山 可住

あまり親しすぎてごく当りまえの「有難うございます」と素直に出ない、うっかり出せば甘えになりそうでつい……これも自分が母の分身である為か。

鍵束の輪には嵌めない鍵を持ち

島居 百酒

人それぞれに秘密はあるもの、誰にも見せず自分だけ自由に出来る鍵はそつとして持つて置きたいもの、謹言実直の百酒さんにして然り、ましてや。

青だけで渡りきれない老の杖

若林 草石

交通地獄は老人の行動範囲を狭くする。広い道路ではまん中に安全地帯を設けて欲しい老人の悲哀を感じる。

約束を違え素顔を見てしまい

越智 一水

平素柔和な人でも一瞬、別人のようになる時がある。おそらくそれが素顔であらう。

虫の羽根ブラカードめき蟻の列

田垣 方大

捕えた虫をみんなて運ぶ蟻の姿が面白くつかまえている。ブラカードめきで運ばれる虫がどんな虫か想像出来る。

もの言えば涙が邪魔な嬉しい日

堀江 正朗

最近息子さんにお嫁を買われた正朗さん。嬉しい時の涙は溢れ出るものだ。

未知数の夫へロマンの灯を消さず

林 瑞枝

未知数とあるからには結婚してまだ間のない夫の事だと思ふ。何かを期待するのも女心かも知れない。

ごめんごめんお父さんに似て生れ

小島 蘭幸

何を卑下するのか一見弱々しく感ずるお父さんだが、人の好い子煩悩な面があつて嬉しい。奥さんが美人らしい。

七合目あたりで締める靴の紐

浦野 和子

やれやれといま登つて来た道を振り返り乍ら締める靴の紐。こころで心の紐も締め直さねばならない。

風船は虹まで行ける夢を持ち

不二田 一三天

童話の世界にいるようで明るくて楽しい句。虹まで、が幻想をそれとなく引き出してくれる。子供だけでなく大人の夢であつて欲しい

と思ふ。

つまずいた事も小石が罪を着る

清水 一保

つまずかれた石こそ災難「くそつ」とその石を蹴飛ばした人間にこそ罪がある。人間以外の動物はそんな事をしないだらう。

無医村へ女医が天使のようにくる

梅本登美也

漁村か山村が知らぬが日本にもまだこんな所が沢山あるようだ。女医を迎える村人の素朴な姿がまざまざ浮んで来る。この女医さんが美しい天使のように見えるのであらう。

顔中を口にした程孫笑ひ

大江 秋月

私にも大、中、小、数人の孫が居る。大げさなようだが屈託のない顔で笑う孫は生ききとしてゐる。

正直に言うからまともに跳ね返り

中原比呂志

言葉のあやと云うものは難しいものである。ずばつと云うから相手の心臓に突きささつてしまふ。弱味をつかれた跳ね返りはどきついもの、用心、用心。

身晶屑になるかも知れないが捨て難い句

銀の鞍置ける駱駝にした女

若柳 潮花

回廊は緑の風が従いてくる

正本 水客

父の日を父は決して口にせず

菊沢小松園



著者 若本多久志

「続・老いの坂」句集に想う

菊沢小松園

ある一部の人達を除いて川柳に多年親んで居る人々が大抵そうであるように、多久志・若本真彦さんの此の句集、「続・老いの坂」を瞥見しての第一印象は至って平静である。背伸びして少しでもその偉大さを誇るような、気障さは片鱗もない。真実有りの儘の、多久志さんの姿を此の句集のどの頁にも散見する。肩肘張って人を見下ろす成功者の尊大さは微塵もない平静そのもので、多久志さんが接してそして語りかけて呉れる。非凡な凡人多久志さんの句集である。第一に自由であり、奔放であり、無碍であり、そのすべてに謙虚さがある。

昭和四十二年、前の句集「老いの坂」が出ている。その時の書評は川柳塔誌上に清水白柳がして居る。願くば私はこの度の「続・老いの坂」の書評も白柳にして欲しかったが、不幸幽明境を異にして今はその手段もない。頼まれて私がその任に当る。然し乍らこれも由縁のない人間でない、白柳とは私が二十四歳、白柳二十三歳の時代に知り合って白柳没時までの四十数年の交流があり、私がやって不思議でも何んでもない。然も多久志さんとは私が若い時代御来阪の砌、確か三度お目に掛けて居る。川柳の因縁はある。

レジスタンス敬老会へ不参とす
どの部屋にも老眼鏡を置いて閑
老いぬれば夫婦喧嘩もいく久し
傷口をなめ合うように老夫婦
落ちていた静かな枯淡の境である。騒々しさや、劇しさや、賑やかさはないが、研ぎ澄まされた深淵の静まり返った静寂さとも言うような深い宗教的なものさへ伝えてくれる。従来の句集にない異なったものさへ我々の心へ迫ってくる何かがある。我々が以前から持つ居た心の奥に抱いていたものを、落ち着いた手で揺り動かし気付かしてくる。人は置かれた環境と宿命に依って人生観も使命感

も変って行く。それは自分自身に気付いていない時も気付いていない時も徐々であっても変化する。落ち付く処のその人の持ち味、究極の個性の権化が有りのままに窺い得る時、人はそれを老境というのだろうか。

一滴の水が地に落ちて潜り抜け寄り集って



花束を贈る高橋幸代さん

一節の流れとなり、地上に湧いて泉となり、川となって流れて谷川という、小さい乍らも一気に流れて奔流となり、大川となり悠々たる大河となる。若い川の時代勢いに任せて目の廻る忙しさの中に無理も無茶も通す急がねばならぬ目的のために、華やかさを求める現在のために、明日の栄光のために夢は無理を覚悟の奔流であり、食うか食われるかの血気の活動の中に、しばしば河は流れる哀歎も悲喜も織り混せて河は流れる。いくつかのその間の犠牲も必要の前に眼を閉じねばならなかった眼醒め悪さの思い出も活躍されて来た所謂成功者の思い出の中に没入することは、けだし止むを得ぬ結果かも知れない。

敢て多久志さんに、どんな思い出があり、如何な神経質的な過去があるかは少なくとも華やかな表街道以外は私は知らない。人の思いの深さや内面的な思慮などは常人以外は危険な憶測に過ぎまい。御本人が何と考へ何と思ってもそれはよ目は入れない禁断の園に他ならない、只落ち着いて寂境に居られる現在の伴せな多久志さんの揺るぎのない環境を羨望するのみである。

先年私は多久志さんが尼崎日産会長を退かれた時の祝吟に「西の宮ここにも松下幸之助」

の句を贈った。全国にあらゆる大中小の幸之助が居られるが多久志さんが何れの部類に居られたかそれは問題ではない、心豊かに明日のある老境を楽んで居られる姿は正に第一級のものであると信じる。句は人であり人は句である。

肩書をつつとり人間となる

忘れるという知恵老いのすばらしさ

顧みて時効になつて罪の数

先生と呼び先生と思つてず

性格の通りみかんの筋を取り

読み切れぬ蔵書抱えて道遠し

★

川柳句文集

「続・老いの坂」

頒価千円送料とも

中島生々庵―粉飾のにおいが少しもしない。オーバーな表現の句が一つもない。体当りの句ばかり……。

序文 中島 生々庵
選句 菊沢 小松園
編集 若本 多久志

発行者 若本 多久志

▼句集ご希望の方は本社へお申し込み下さい

愛染帖

橘高薫風選

今治市 矢野 佳雲
合掌の手の片方で人を打ち
お別れの宴のバセリは捨てて置く
大阪市 河野 君子
水中花過去をきれいなものとして
ふみの日に燃えず冷めずのペン流す
大阪市 小出 智子
玄関を出るとき男は空を見る
玄関を出るとき女はふりかえる
青森市 工藤 甲吉
みちのくの風さわやかに青りんご
ひっそりと塗師の陰に木地師いる
兵庫県 辻 文平
僕かも知れぬ男の溺死体
逆境に夢のかけらの硯石
高知市 西川 富恵
敗戦の陽は背中より昏れてくる
かなしみの胸に入り来る海の音
和歌山市 若宮 武雄
エプロンの白で翔びたい色隠す

とても笑えないピエロを観るピエロ
和歌山市 西山 幸
くたびれた影と小さく今日も昏れ
月冴えて冗談冴えて哀しかり
大阪市 川口 弘生
ピンチには悲の強さも頼られる
神の子も死ぬ定めもつ蟬の声
今治市 月原 宵明
年金を貰い個性が消えてゆく
すぐそこに秋侍べらせて水中花
兵庫県 遠山 可住
土からの便り双葉がそつと開き
いろいろな風が溶けてる碧い空
八尾市 宮西 弥生
左遷地がかぶると帽子影になる
冷凍の魚で祭りをもつて来る
島根県 小砂 白汀
首くくるところまで想いつめはせぬ
この先はお任せしますと裁かれる
旭川市 朝倉 大柏
鬼もまた手の鳴る方へ向きたがり
象徴と木偶父の日のあたたかさ
倉敷市 小幡 里風
呼べばすぐ聞える距離で川があり
矢をつがえやおらバイブル読んでいる
米子市 佐伯 越子
ライバルへ深夜に筆を研ぎ澄ます
俵の日日の私の椅子たのし
祝融氏顔の花だけ置いてゆき
影うごき暑くなりだす蟻の列
萩屋川市 小林 鯛牙子

倉吉市 奥谷 弘朗
末席に切り札だまって腕を組み
言いわけの裏を女房に読み取られ
着流しのよき例にして句を語り
解禁の鮎より多き卒の数
和歌山市 福本 英子
田植機の響き田植に道開けず
手で読んで温み伝わるボランティア
八尾市 渡辺 章
白紙に書かない反古を捨てている
地の底に一気に沁みる雨を乞う
八尾市 高橋 夕花
避けた矢がそのまま風になつていた
倉敷市 中田 圭子
足のかずが哀れでムカデが打てぬ
鳥取市 武田 帆雀
町工場みかん箱にも鉄を詰め
京都市 山本 規不風
ほんとうは易者に云わぬ女達
倉敷市 田垣 方大
激突の雄を尻目に雌は喰べ
愛知県 池田 香珠夫
肉体も心もスケスケルックだな
兵庫県 中田 白李
定年へだけ先輩に追いついた
高槻市 若柳 潮花
翔んでいる女は顔を気にしない
萩屋川市 宮尾 あいき
ペンキ屋の店先白い花が咲いている
尼崎市 黒川 紫香

無礼にも社長に辞表突きつける

尾鷲市

渡辺伊津志

母徳ぶ夜の時間が海にあり

八尾市

大路美幸

小さくて祈り離せぬ夫婦傘

東大阪市

竹中綾女

ひとり言だまって聞いている遺影

倉敷市

水粉千翁

愁い妖しおんな玉三郎炎える

高知市

宇佐美和子

虹をくぐって五月の愛を奪つなり

川西市

戸田古方

読了のしるしつけたら雨が止む

枚方市

栗林光夫

バス待ちの雨は傘から傘に落ち

富田林市

岩田美代

手も足も出ぬ日できつり揉んでいる

岡山市

川端柳子

整わぬ顔でお小言受けている

米子市

八木千代

同距離ととても思えぬ下り坂

京都市

松川杜的

西山の涼風無住の札所もあつてよし

大阪市

白石潔

鎮魂の歌がきこえて夏の雲

寝屋川市

柴田英壬子

あとからあとから夾竹桃の朱唇

今治市

越智一水

猫の目のように農政もてあそび

島根県

榊原秀子

白い花の季節で白い花ばかり

昼寝する犬の昼寝の横でする

寝屋川市

江口度

旅に来て歩巾の合わぬ街を行く

羽曳野市

麻野秋畝

描きかけのまま山水画梅雨を越す

島根県

山本博也

ギクシャクと投げてゆるがぬエースの座

町田市

竹内紫鏑

しょうむないしきたりにある人情味

鳥取県

鈴木村諷子

前進の号令戸惑う蟹もいる

名古屋市

越村枯梢

雲切れた隅から舞台照明に似た夕陽

京都市

都倉求芽

夕陽いまひと日の余韻抱いて没る

和歌山市

松原寿子

じだらくな生き方もあり百合開く

八尾市

高杉千歩

失うた時の痛みよ銀杏道

和歌山市

浦野和子

エンジン注油に似たる御晩酌

鳥取県

清水一保

大猿の干支も夫婦で添い遂げる

米子市

野口美世

上げるのにと花泥棒へ妻の愚痴

東海市

小山悠泉

薄れゆく記憶まぶたに赤トンボ

平田市

久家代仕男

こずえ皆笑いさざめく雨上り

米子市

石垣花子

若いもんきらい私の海汚す

名古屋市

大林曲ん手

ふるさとの低い山だが恋しがり

唐津市

山下勝一

背を向けて閉める障子の意思表示

羽羽市

三宅ろ亭

省エネに適うか緑陰机出す

鳥取県

和井親洋

小石でもいいじゃないか一人は一人

唐津市

桑原掬治

医師の子と小学生でも分る所作

和歌山市

坂口公子

町角でパントマイムを見せた女

呉市

山根里香

胸の鈴鳴って鏡にのぞかれる

貝塚市

行天千代

末っ子が通訳をする倦怠期

大和郡山市

森田カズエ

内縁の夫婦故郷に遠く居る

大阪市

北勝美

山陰は眠りが深い雨の朝

宝塚市

吉田笑女

衣食住足りて医者との縁切れず

松江市

梅本登美也

連作に土がだんだん拗ねてくる

和泉市

西岡洛醉

凡夫凡妻凡人の域が好き

米子市

小西雄々

追従も世渡りとして待つチャンス

島根県

角耕草

テールは紫檀どうにも落着かず

西宮市 朝山 千世子
 ストレス解消一段冴えている謡
 島根県 榎みどり
 さりげなく書いて心をひく返事
 島根県 岩田三和
 一本も歯なしはあさんフキ一荷
 倉敷市 藤原桜山
 不発弾結局今日も妻が抱く
 大阪市 西出英子
 うしろめたい気持が多弁にさせている
 島根県 西村早苗
 蟬しぐれ一日旅のプランねる
 八戸市 小泉紫峰
 両方に義理ある席で啞になり
 堺市 伏見茂美
 派手すぎるセットで小走りして帰り
 出雲市 園山栄
 買えばある茄子を作るに流す汗
 出雲市 板垣夢酔
 口説かれてそれから女良く眠り
 岡山県 二宗吟平
 皿までもなめて小犬の心足る
 豊中市 満仲きく子
 新しい汗をかいてる風呂あがり
 米子市 林瑞枝
 そよ風のバラード鈍行にひとり揺れ
 松江市 谷真風
 鐘聞いて今日一日の旅終る
 島根県 飯塚虎秋
 待たされる改札口の大時計
 岸和田市 古野ひで
 くみかわす父子へ母が眼を細め
 堺市 高橋千万子
 銀の匙メロンをもらう虫のヒゲ

米子市 青戸美佐
 耐える事知らぬ子供が親になる
 大阪市 欄蘭
 塩梅を明治女が見舞に来
 浜田市 佐々木裕
 妻の留守ビール一本冷や奴
 大阪市 藤田頂留子
 身綺麗な老婆過去を話さない
 唐津市 浜本義美
 社員皆あかんと云うた服が売れ
 岡山市 船越汽水
 クランケの命の前の神の使者
 唐津市 新岡回天子
 勲六等の位牌に職人の労しのび
 和歌山市 堀端三男
 階段の一步で決まる人生譜
 唐津市 田口虹汀
 壁の染み何度塗っても赤は赤
 岸和田市 清野こう
 句座楽し今日も仲間が一人ふえ
 大田市 藤田軒太楼
 貧乏性を誇りと思つ妻頼もし
 岡山県 岩道博友
 除草機の割りに時間を空費さす
 出雲市 高橋可保留
 眼を閉じて今日の雑念洗う風呂
 和歌山市 津田与史
 心にゆとり出来ると人がついてくる
 倉敷市 藤井春日
 けちつてもけちつても家計赤字です
 岡山市 井上柳五郎
 熟れる日も夢店頭青みかん
 羽島市 伊藤静枝
 五十肩十年過ぎて見舞われる

岡山県 池田半仙
 古箏笛苦節滲んでいるいたみ
 唐津市 岩崎実
 旅に出て化粧たのしむ勤め妻
 大阪府 江城修史
 とめどなき慕情癌とは知られず
 鳥取県 石井雅水
 フルチンの頃は還らぬ川となり
 唐津市 浜本久仁於
 苦勞した様にも見えぬ後家の店
 島根県 木村はじめ
 ジレンマへ空の青さを吸いに出る
 岡山市 串田句味地
 更生へにがい薬を舐めている
 今治市 新居田胡頼子
 水しぶき嬉しく浴びる川下り
 島根県 竹内寿美
 知らぬ間に子が離れ去るおそれもつ
 出雲市 石倉英佐子
 ガラス王今更妻によつ言わす
 岡山市 砂田静佳
 石のけて小虫を探歩きぞめ
 兵庫県 野々口ゆう也
 老いがまた愚かしくなる余裕もち
 山口県 高崎雀声
 総選挙待てる資金つきる頃
 三重県 坪田冬花
 仕事場は今日も人影見えぬ梅雨
 羽島市 時田誠一
 一日の思い出たつた二三行なり

▼投句先

〒560 大阪府豊中市中校塚三丁目13-15
 桶高薫風宛 (ハガキ一人三句以内)

ハワイだより

前山 北海

中島生々庵主幹宛

▼生々庵主幹のご長男中島一彦氏の長男滋郎氏（阪大医学部学生）と、長女の佐和子さん（甲南女子大学部学生）の二人で在アメリカの親類宅から招かれ、夏休みの見学旅行に出かけ、その帰途ハワイで五泊。その出迎えるため一彦氏夫人が末女の慶子さんと共にハワイまで出かけ、ワイキキのホテルで落ち合い、先日賑やかに帰国されたが、その五日間のお世話になり一層の愉快な旅行になったそうである。その時、北海氏から主幹宛の手紙をことずかってこられたのが、つぎの文面である。（スペースの都合で要用的なものとなった――文責編集部）

中島生々庵様

――拝復、二十三日付お手紙を二十五日正午前に落手しました。早速連絡しましたが、ワイキキ・サント・ウィラ・ホテルにご長男がまだ到着しておらず、夜になりやっと連絡がつき、ご長男と母上とも電話で話し、二十七日はハワイ大学医学部見学の予定であるが、二十六日は予定がないとのこと、二十六日オアフ島をご案内を約束、同日午前九時にホテルへお迎えに行き、私のボロ車でワイキキを見物（田中・ニクソン会談のクイリマ・ホテルで昼食―真珠湾など眺め夕刻にホテルへお送りしました。）

数年前、林蒼蛇様幹事が亡くなり、川柳塔の各地柳壇への通報が途切れ残念におもいます。同人の中に故人となったり健康上の都合で同人辞退など、現在は私だけが同人となっていることです。

ハワイの柳人に、句会吟だけでなく、雑詠も作るようにすめたいと思っています。

（編集部から―原稿の締切は着便次第に致しますからドシドシご送稿ください）

拙著「ハワイの伝説と史蹟」は、ハワイの川柳大会へご出席くださった方に贈呈したいと思っております。（まだ入手されていない方は郵送料百六十円添えて本社編集部へお申し込みください。先着順とします―編集部）

私は六七年の六月九日に妻を亡くし、デュープレックス隣りに長女夫婦がおり、その後はずっと自炊をしております。

路郎先生がお亡くなりになって十三年。葎乃奥さんはお元気とのこと、ご長命をお祈りいたします。

川柳ウィロー社

前山 北海報

横車押せば通らぬ道と知り

横町で出会った前妻そっぽ向き

横車押すに押されぬ年となり

横顔で障子に並ぶ影二つ

横道にそれた話のはかどらず

聞かぬふり横を向いても耳を立て

あの人があるから道を横にそれ

横好きも年輪深い趣味となり

ふところの都合で横に首をふり

不義理してまともに見られぬ顔となり

横車押すだけ押して養老院

たての物横にもせぬと妻の愚痴

親蟹の横にも這えと子に教え

横車押して一生一人居る

算盤をはじいて頭横に振る

知能犯生死を賭けて横流し

横槍が入ってフアイトもつと沸き

虹 宵 草 海 紅 溪 三 十 四 梨 花 カロ女 雪 女 蒼 塵 蒼 生 三 石 晚 舟 彩 民 公 女 万 里 歩 風 影 拜 山 秀 山 北 海

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

小西雄々

誰も来ぬ個展へ煙草ばかり吸う

有勤 芳仙

ポスターも貼った。親しい友人には招待券も予め贈呈しておいた。しかし期待を裏切り当日は誰も来てくれない。むやみに煙草を吸うのみである。自信過剰が足もとから崩れ焦燥感がつくる。巻頭を飾るにふさわしい句。タイマーヘタ餉あずけて共稼ぎ

野口 美世

毎朝、出勤前に炊飯器にタイムスイッチをセッとして、出掛ける共稼ぎの光景がうかがえる。全国的にもこうした共稼ぎの夫婦は多いと思います。

足むけて寝られぬとこが多すぎる

白石 潔

恩を受けた人や、お世話になった方へ足を向けて寝られないという心境が嬉しい。暗いニュースの多いなかで、思わず微笑みました。お互に呆けたと喧嘩にもならず

越村 枯梢

若い頃は互に自己の主張を通すため、火花を散らし大喧嘩をしたこともあったが、人生経験を積むうち角もとれ、「齢ですな、呆けました」と笑いの中で何事もすんでしまふ。定年近い勤め人や、老夫婦を頭に描くと一層興味がある。

腕を組むポーズ父権を失わず

中村 優

父親の存在価値が低下している現在、父親としての座を守っているこの句に接し、「なるほど」と感心しました。厳しさの中に優しさを秘めた父親を連想します。

嫁じゃない娘と思うている平和

満仲きく子

嫁と姑とのトラブルはあとを絶たない。しかし、自分の娘と思って接すれば、家庭は平和な灯に照らされ、嫁も生みの親と思って孝行してくれることでしょう。

早よ飲んで寝ろとばかりの妻の酌

中谷 利美

妻としては、寝るまでにあれもこれもと忙しいのに、何時までも晩酌の相手ではない、たまったものでない。「早う飲んで寝てほしい」と思っているのを見抜く夫の鋭い感には敬服。直前に亡母がくちに似た枇杷熟れる

吉岡きみえ

死の直前に母が少々の枇杷を食べた。あれからも何年か経ったが、毎年、枇杷の熟れたのを見ると亡き母を思いだす。亡母を偲ぶ姿が見えます。

胸ボンと叩いたほどに頼られず

朝倉 大柏

「何か困ったことが有ったら言ってこい」と、胸をボンと叩いて威勢のいいところを見せたが頼ってくる者は一人もいない。口で言うほど頼りにならぬと、他人は思っているのに……。「胸ボンと」の十五が生命。

囑託がかつての部下に使われる

西本 保夫

サラリーマンの悲哀が上手にまとめられている。定年退職後、囑託として二度目の勤めではかつての部下の指示で働く場合が多い。経験句と解したい。

ご免とも言わずに間違い電話切れ

藤原世史春

電話のベルが鳴る、誰からかな……と思いつながら受話器をにぎる。先方から「〇〇さんのお宅ですか」との声。「違います。××です」と返事すると「失礼しました」の言葉も言わずガチャンと切ってしまう。深夜などは迷惑千万である。

足ぶみで待つてくれる人がいる

吉田 寛子

足ぶみをしながら待つてくれる彼。近づいたら手を差しのべてくれるでしょう。句の中に明るいものを感じます。そのほかチェックした句。

教室に明るさ放つ更衣

居田胡頰子

塾通いさせ中程という期待

大垣たもつ

川柳塔社

物故同人(3)

不二田一三夫謹記

「川柳雑誌」から「川柳塔」に改題されてからの物故同人を書いたのは47年9月号だった。二回目は52年9月号である。

七十歳以下の方が多いのはどうしたことだろうか。今から思えば清水白柳氏は六十五歳という若さだった。北川春葉氏と森田茗人氏は六十二歳である。

心痛むのは交通事故死が三氏おられる。皆さんのご健康を祈ります。

〔41年〕戸倉普天(兵庫県) 78歳・長野井蛙(防府市) 67歳・〔42年〕松江梅里(大阪市) 60歳・木村十悟(大阪市) 63歳・脇田勇(大阪市)・〔43年〕河相すむ(西宮市) 64歳・那谷光郎(加賀市) 74歳・〔44年〕工藤安亭(青森市) 65歳・服部十九平(岡山市) 67歳・関戸宗太郎(小松市) 43歳・井上旭峯(玉島市) 75歳・碑弓彦(大阪市) 40歳・〔45年〕後藤梅志(大阪市) 77歳・藤本礎山(鳥

取市) 59歳・橋本緑雨(大阪市) 78歳・島野大吉(大阪市) 63歳・清水白柳(大阪市) 65歳・〔46年〕伊藤泉睦(大阪市) 46歳・桜川不水(下関市) 73歳・平尾太希志(大阪市) 58歳・酒田清子(大阪市) 60歳・宮地双楽(大阪市) 75歳・川岡霊眼子(諫早市) 64歳・〔47年〕若本あき坊(ハワイ) 82歳・〔48年〕垂井葵水(和歌山市) 52歳・〔49年〕福島鉄児(大阪府) 65歳・〔50年〕永宗宗義(岡山市)・永尾英断(兵庫県) 54歳・今西章雅(大阪市) 67歳・水谷竹莊(大阪市) 73歳・福井野路路(大阪市) 83歳・田中万作(和歌山市) 62歳・池田古心(岡山県) 70歳・井上湧三(大阪市) 77歳・北川春葉(大阪府) 62歳・〔51年〕堀内晓風(大洲市) 76歳・阪上十止庵(大阪市) 60歳・山田季賛(大阪府) 50歳・森田茗人(鳥取市) 62歳・福井多蘭子(大阪市) 63歳・吉田水車(名古屋市) 74歳・小川静観堂(伊丹市) 89歳・葛城伊三郎(岸和田市) 69歳。

竹中肖二(東大阪市) 昭和53年1月5日七十三歳。〔署二・明治38年7月生まれ〕綾女さんとは、おしとり作家として、東大阪川柳同好会を創設し柳界に尽くした。〔本社元常任理事〕最後の12月号に発表した句

―意地はもうないお迎えを待つばかり

沢山福水(和歌山市) 昭和53年2月8日七十四歳。〔明治36年10月生まれ〕柳歴四十余年というベテランだった。川柳わかやまでは初

心者コーナーを担当。最後の句は
―秒針のいつかは止まる日を惜しむ

小浜牧人(西宮市) 昭和53年5月10日六十七歳。〔本社元常任理事・路郎賞作家〕西宮北口句会の代表として活躍
―揚つても揚つても雲雀に空がある

城 一舟(堺市) 昭和53年6月2日六十四歳。〔本社元理事〕
―生きてたら食えん果物供えられ

岸 南柳(大阪市) 昭和53年9月16日九十一歳。駒つなぎ句会を主宰。
―人生に因縁というよい言葉

森 寿風(姫路市) 昭和53年十二月? 五十三歳。国鉄マン。
―回り道したおかげです今の位置

西出一栄(大阪市) 昭和54年二月二十七日七十六歳。〔本社元理事〕昭和三十年故清水白柳氏を指導者に「川柳玉造支部」を創設。故酒田清子さんとは姉妹作家として有名。著書に「ねっくれす」遺句に、

―クラス名簿 鬼籍の友をかぞえいる
代表句に、

―添わしても根じめの花はあつち向き
西 いわを(藤井寺市) 昭和54年5月21日七十五歳。〔本社元常任理事〕「川柳」時代に

路郎選のグランプリを獲得した名作家。
―歳とって呼吸のし易い処に住み

髪

津 守 柳 伸 選

おじいちゃん白髪増えれど知恵袋
 大事な毛すだれの様に並ばせる
 母さんの白髪一本十円で
 髪黒く描いてくれたる孫の図画
 断髪はしても後家ではない昭和
 ひと筋の髪へ捕縄の靴が減り
 髪染めてまだ一線でひけとらず
 勝名乗髪垂れたまま蹲居
 白髪より少ない黒が櫛につき
 洗い髪今日一日の悔は捨て
 日本髪娘が日本髪娘を誘い
 一本の髪へ刑事の眼が光り
 人間の弱味髪型変えて出る
 見栄捨てた女丈夫の束ね髪
 長髪が父の好かない息子の育ち
 初産へまどろむ妻のみだれ髪
 桐箱の遺髪へ何の煎七等
 束ね髪きりりと寡婦の意地を見せ
 逢う時が袂れと思う白い髪
 おさげ髪胸にいとしい人が住む
 関取りの髷も乱れた勝名乗
 髪型も変えて女の衣更え
 洗い髪の感触風も好きらしい

千子 なりこ 掬治 ゆう也 虹汀 雅風 花亭 無亭 博友 大柏 魚山 実男 句味地 豊生 夢生 軒太楼 雅水 逢津子 登美也 白李 綾女 登

誰からの電話か髪を気にしだし
 剃髪は女の性をすてた筈
 よんどころなく妻の虎刈りに耐え
 人妻の隙少し見せ洗い髪
 一寸じの髪鑑識へ護送され
 失速を知らぬ少女の髪飾り
 胸張つて明日を生きさる髪を梳く
 お見合に母が乗り気の白髪染め
 一すじの髪に着物を脱がされる
 恋人が変り髪型また変り
 愛憎に染つた髪は栗色で
 散髪がすめば悩みが消えていた
 髪染めた夫へ小さなシット抱く
 白髪染嫌な噂に立向う
 洗い髪女の性の燃える時
 妄想もともに流した洗い髪
 乱れ髪気にして妻の快復期
 年金の生活へ髪がよくのびる
 肌の香も髪の匂いも僕のもの
 佳 千代三
 髪洗う背に再婚を聞きながし
 髪毛も切った入社を見送られ
 浮世絵の髪に詫ししている言葉
 セットして寝るには惜しい夜となり
 栗色に染めて女の謀りごと
 人 観洋
 親に似た白髪で同じ道歩く
 負けられぬ歩巾へ髪を染めてみる
 地 一路
 思い切り髪型変えて旅に出る
 天 なみ

軸
 結い上げて女らしさを取り戻し
 ショック
 中 筋 三 幸 選
 立直り遅しショックの程が知れ
 オイルショック慣れた文化を慌てさせ
 ショックした話は聞かずに耐えさせる
 あのショック生きている私かまだ不思議
 貴女にはショックな話かも知れぬ
 癌看護ショック悟られまいとする
 叩いたらショックで鳴った古ラジオ
 君の瞳にショックが欲しい色がある
 放つとけぬショックの渦に巻きこまれ
 悶悶のショックの母に子が帰る
 余つ程のショックが無口の父となる
 逆転のショックへ拍手の敵味方
 昨日より値上げですよとさりげなく
 吸殻の中でショックの待ち呆け
 ショックショックもつあの靴は売っていた
 ショックから立ち直るにもやはり金
 伏せて置こ事実を知れば狂うだろ
 交通事故ショック死したいが遺児がおる
 ハンドルのショック野良大機いたらし
 鳥の足跡見つけたショックの三面鏡
 ショック受けても信じたい親であり
 ろ亭 軒太楼 博友 観洋 凡九郎 代仕男 宵明 裕 句味地 善四郎 はじめ 富子 勝一 きく子 七面山 本蔭棒 夢酔 春日 どんたく 一路

皺

月原宵明選

見出しだけ読んだシヨックに馴らされる
シヨックだけ残してあの人遠ざかり
雷のシヨックゴルフを口にせず
シヨック見せぬ後姿が淋しそう
信じてた妻が本音を吐くシヨック
平然とシヨックなことを赤電話
シヨックから娘は良縁も振りむかず
終る迄知らせぬシヨックどう話す
面会にきた子貴方にそっくりよ
取材するベンが震えているシヨック
若き日の日記が子供の部屋にある
住
わたしのシヨック誰かがつかで哄ろっている
シヨックから母が最初に立ちなおり
嫁かばう子の造反に胸裂かれ
拿捕されたニュースへ漁村静かなり
瞬間のシヨックそのまま冷凍魚
人
シヨック醒め左遷の土の温かみ
子
秘密聞けばシヨックのことばかり
地
天
一つ目のたるまシヨックの座を覗み
虹汀
優
越
子
子

水引にしわのないのが選ばれる
生き様を語りて皺の顔無口
私の恥と妻がアイロン掛けるしわ
体験の一つ一つが皺になる
長生の秘訣をきかれしわ笑い
短気だと眉間の皺が告げている
進学の子へめつきりと目立つ皺
下町の暮しに馴れた紙幣の皺
紙のしわ生かし紙人形の味
湯上りの顔は素直な皺をみせ
皺一つない気味悪い女史の顔
笑えない生涯だった深い皺
地球の皺衛星くつきり見せてくれ
指の皺出るまで浸る薬湯治
子だくさんより多いしわを持ち
肖像画すこうし皺を減らしとき
皺くちやのGパンこれが青春さ
生ビール眉間のしわが消えている
隠しても鳥の足跡喋り出す
皺のてつぺんそれがエベレスト
集金へ一番皺の札を出し
しわくちやの顔が写って喜寿の宴
わざと皺よせるおしやれもあるヤング
苦勞した皺が柔和に波をうち
一合で酔える極楽しわと居る
カーターの目尻の皺にある平和
皺にせぬようにおんなの座りよう
特価品の着物と皺が喋り出し
母の皺一つ一つにある歴史
おんなもう皺にはふれて来ぬ話題
孫の指眉間のしわを消しに来る
満津子
実
悠
泉
魚
山
虹
汀
宏
裕
竹
馬
み
どり
カ
ズ
エ
早
苗
白
李
胡
顔
子
花
子
方
大
曉
明
本
蔭
棒
枯
梢
古
人
無
人
回
天
子
ど
ん
く
た
も
つ
洛
醉
勝
美
日
春
仕
男
虎
秋
凡
九
郎
満
津
子

川柳「ささやま」

三百号記念句集

一ト握りの中核作家をとりまいて川柳
の一年生が楽しい句集「ささやま」を出
しました。

余分少々あります (二千五百円)

669-25

兵庫県多紀郡篠山町福住三三四

遠山可住

調理士の腕を競わす鯛の皮 伊津志
帰依をした尼僧の顔にしわはない 軒太楼
刻まれた皺に不孝の罪詫びる なりこ
セールの化粧で小皺とれていき 実
小さい皺浅瀬へ寄せて雑魚遊ぶ 里風
住
皺があつて手織木綿の味が生き 寿美
手鏡の小皺に慌てた日の化粧 茶人
母の手の皺の汚れは落ちぬまま 規不風
皺出来てからの紙幣が回り出し 武水
父親のひたいの皺に僕がいる 勝美
人
魚屋の紙幣の皺からでたうろこ 里風
折り皺を女 女として見抜く 茶人
天
子の画く親の顔には皺がない 一路
軸
車券買う札はよこれた皺をもち

初歩教室

題——善意——

本田恵二朗

君の詠り、君の声色、そして君の動作の癖が感じられる、ほんとに君らしい句だ——と褒められるほどになると、僕は個性の染みた句が生み出せるところまで来たいと思ひ込んでそこに安住してしまひ勝ちである。その安住がくせものである。そこに温く温くと安住してしまつたら、それが退歩に繋がって行くことを知らねばならない。

君らしい句だという褒め言葉や、批評を否定する気が湧き出さねばならない。否定するところから一步前進の扉が開かれて行くことを知らねばならない。

善意の芽ふまれて論ず語につまる 静佳
善意から生れる誤解だつてある 同

(だつてある——この表現法は、句会で入選する率の多い表現法とされている。そう云われるほどに流行すると、すでに古いと云われてもしかたがない。(新聞に包む真ごころだつてある)この句がそのよき例句とされている

が、先月号に(新聞に包む真心が温い)という一句が現われて、私はいささか驚いた。この二句を比べてみると、先人が生んだ前句の方が魅力がある。かと云つて、この手をあまり用いない方がよさそうでもある。若者は善意の箱を振り向かず

(善意箱見て見ぬ振りの若い脚) 冬花
甘過ぎる善意の裏にある毒芽 御前

(甘過ぎる善意の裏を見てしまひ) 美乙女
善意傘どこへ連れられ行つたやらい

一寸した行違ひ善意逆になり 同
(一寸した手違ひ善意が逆になり) 小雅子

チャリテイショー善意のベルで開ける幕 伊都
(チャリテイの幕開け善意のベルが鳴る) 同

満員のシルバースhirtにある善意 貴之
俄雨善意の傘に恋芽ばえ 同

散歩道善意の花で彩どられ 同
(散歩道善意の花が笑みかける) 登

物好きと云われ善意の輪を上げ 同
貧しくとも善意の心燃えつつけ 同

(小さな善意の灯だが美しく燃え) 同
ハビリー善意にながめ腕を貸し 同

掛けぬのも悪し善意の狭い席 無入
(太尻へ善意の席が狭すきて) 同

ポケットに善意の切符ベルが鳴る 同
(ポケットの善意の切符へベルが鳴る) 同

病人へ善意の嘘なら許される 同
(病床へ善意の嘘も少しませ) 同

見せかけの善人木からすべり落ち 善四郎
(見せかけの善意の渡金はげかかり) 同

金で済ます善意さもしものうち 同
(金で済ます善意の貌に笑みがない) 同

匿名の善意が郵便法に触れ 保夫
秘められた善意を美しいとも思ふ 同
(秘められた善意はいふし銀の彩) 同

(二タ心などないのに善意疑わぬ) 誠一
平凡に生さる感謝のボランティア 同

旗色はどうあれ善意へ夢つなぐ 同
彼の妬心善意途上に雲が晴れ 同

(妬心の雲善意の陽光に晴らされる) 同
ふところに善意の金はこれっぽち 三和

(ふところは寒いが小さな善意の灯) 同
発言に反対できぬ善意なら 同

(善意の発言へ反対の語がない) 同
何事も善意にとつて円く住み 三男

手の平に乗る善意かも席ゆずる 同
(手の平ほどの善意です席ゆずる) 同

一円の善意千金の価する 同
かくされた善意人柄が隠れる 同

(不言実行の善意に人柄がにじみ) 同
世の中は善意だけでは通れない 瓢太

(生きる道善意だけでは通れない) 同
踏みつけにされた善意が泣いている 同

(踏みつけにされた善意が涙ぐみ) 同
ふところも知らず善意が呼びかける 同

(後仕末善意に任せ夜逃げされ) 同
後仕末善意に任せ夜逃げされ 同

乾ききった心に善意の雨降らす 佐代子
(乾ききった心に善意の慈雨が降り) 同

旅先の善意が芽生え結ばれる 同

白い杖善意の声に励まされ

(白い杖善意の囁き温う聞く)

旅人の心を灯す善意傘

(旅の雨善意の傘に助けられ)

(善意傘旅の小雨に笑みかける)

年と善意積んで円かに嫁姑

(日好日善意積み合う嫁姑)

子の善意母の日には肩叩き

(母の日へ五才の善意が肩叩く)

一步引く心に善意染みわたる

(一步引く善意に温いものが染み)

募金箱善意を待つて街に立ち

(募金箱笑みをたたえて善意待ち)

(募金箱笑くばを添えて善意受け)

献血車善意の人の列ならび

(献血車善意の列の長々と)

里親に行く日指折り楽しんで

(里親に行く日指折り数え)

(ヘルパーに目ですがっている老い一人)

(ヘルパーの善意に老いの目がすがり)

ぐさりくる言葉も善意に受けとめる

(ぐつとくる言葉の裏にある善意)

待合室善意の飾る花が生け

(待合室善意の花がなごませる)

売名も善意のかげに潜んでる

(善意の裏に売名の汚臭する)

折角の善意の席が空いたまま

晴ればれと握手善意の誤解とけ

(ほんとこの善意と解った日の握手)

背に視線うけて善意に勇気要り

(視線の矢が善意の背に突きささる)

胡頹子

同

なみ

同

同

美世

同

美佑

同

同

柳五郎

同

同

紀久子

同

自然を愛し人のゴミまでまとめられ

(自然愛が他人のゴミまでまとめ上げ)

若者の体温残し席ゆずり

善意傘干して返して当り前

崩れても善意の石を積んでゆく

(善意の塔崩れてもまた崩れても)

その場限りの善意の旗が褪せている

(口先きの善意の旗が褪せている)

指先にこめた善意の千羽鶴

人間砂漠善意の花が見当らず

さりげなくかけた言葉にある善意

白い杖バスに乗るのを見届ける

(白杖がバスに乗りきりほつとする)

交番の机善意の花匂う

追伸の中にかくれていた善意

善意の箱素通り出来ぬ過去があり

嫁の善意素直にうけて円く老い

俄雨善意に応えるように降り

ちっけな善意お日様見逃さず

百の善意に戸惑う老人ホーム

作られた善意でもよし姑と嫁

法的に言えば問題のある善意

可愛さの余りが卑屈な子に育て

善意売る言葉の穴に紙を貼る

空洞の善意相槌する狸

硬すぎる善意欠伸の中に逃げ

卒直な意見 善意の中である

落着けば矢張り 善意の友にいる

善意からすすめた策が裏と出て

報われぬ善意 無口になつてゆく

水にこり善意の橋が朽ちてくる

茂美

同

寿子

同

同

勝美

同

慶彦

同

幸代

同

紀美代

同

帆雀

同

同

嘘一つ守り続けている善意

同

題 反対 9月20日締切 (11月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一九一三四

七七一 本 田 恵 二 朗

残 暑 お 見 舞 い

三 井 ケ 丘 川 柳 会
現代川柳の三要素 愛・生・住

薫 亜 度 よし 野 三 博 小 三 琴 英 一 亜
風 鈍 ひろ 生 子 泉 路 郎 音 壬 改 成
念

大 萬 川 柳

「短

い」

入選発表

選 者 川 村 好 郎

投句総数 三百六十三 句
入 選 五 十 四 句

堺 ひろ子

短気とは別に浮子待つ根を持ち

堺 一二三

すぐ散る命を花は悔いていず

桜井 雀踊子

良妻賢母爪は短かく切つてある

藤井寺 吸江

人生の禍福の福が短かすぎ

岐阜 誠一

待つわりに診察時間の済む早さ

八尾 夕花

短いが父の電話に愛が満ち

米子 伊都

古里を語り明かした短い夜

倉吉 弘朗

一日が短いパパは働き手

和歌山 紀久子

短いが故に思い出美しく

和歌山 武雄

金策の足へ一日短かすぎ

大阪 真砂

気短かな父の孤独がかくせない

島根 三和

もう後は短い命何残す

和歌山 としよ

束の間の命を惜しむ蟬しぐれ

島根 みどり

七転び短い人生のあつい壁

和歌山 和子

待つ時にくらべ逢瀬の短かすぎ

岡山 一灯

短文が倅せそうな旅だより

米子 雄々

借りてゐる方は短い返済日

大阪 柳志

寸言の風刺が政治たしなめる

奈良 保夫

面接も短く採用断られ

松原 久子

やれやれも子には短い夏休み

富田林 優

走馬灯廻る短い人生譜

倉敷 方大
儲かっている日は暮れるのが早い

尼崎 利美
一分が長いデートの待ち合せ

今治 佳雲

かげろうの短い命なりに生き

八尾 美幸

束の間の虹にあしたの夢託す

富田林 美乙女

短いと思う逢瀬の帰り道

橋本 木魚

やれやれと短い祝辞にする拍手

大阪 小雅子

短日の冬の日差しにある詩心

大阪 きくみ

舌切り雀短い舌で告訴する

守口 右近

結局は帯に短い人と添い

枚方 星斗

短命を惜しまれながら名を残し

米子 千代

限られたいのちへ蟬も鳴き尽し

米子 なみ

子に意見する父短所つかれてる

鳥取 早苗

お疲れさんそんな短い語の別れ

鳥取 静泉

一日が短く過ぎたうれしい日

鳥取 露杖

短評に師の温りが盛つてある

鳥取 露杖

気短かの拳固口より先に飛び

大阪 道子
釣糸を垂せば短気とは見えす

東子 悠泉
気短かな夫 点滴に耐えている

エリート最短距離の道厳し

西宮 百酒
帯に短したすきに長く嫁きおくれ

久闊と酌めば短い夜となり

大阪 ふみ
気短かの亡父にあった忍の過去

縫い上げをうれしくおろす子の浴衣

大阪 ふみ
久し振りに来た子の便り短かすぎ

佳 句

富田林 花梢
短かった 倅せだった水中花

八尾 鬼遊
燃えつきるほたるに恋は短かすぎ

和歌山 英子
金送れ ただ一行の定期便

大阪 弘生
短い紐も継いで母から荷が届く

守口 右近
長く生き短く病みたい老いの欲

人ノ句

堺 千万子
気短かを糸のもつれに試される

地ノ句

旭川 大柏
再建へ意気込む日々が短かすぎ

天ノ句

天ノ句

大阪 満津子
終いまで聞いてくれない流れ星

選者吟
短かすぎても約手案せられ

昭和五十四年度

ベストテン(七月現在)
一 満津子 一六、五大阪
二 百酒 一四、五西宮
三 優 一二、五富田林

四 道子
一〇 美柳 九 柳志 八 柳志 七 柳志 六 柳志 五 柳志 四 柳志
一一 文秋 一二 大柏 一三 小雅子

一、五大阪 一、五大阪 一、五大阪 一、五大阪 一、五大阪 一、五大阪 一、五大阪
二、〇米子 一、〇和歌山 一、〇和歌山 一、〇和歌山 一、〇和歌山 一、〇和歌山 一、〇和歌山
三、〇和歌山 四、〇和歌山 五、〇和歌山 六、〇和歌山 七、〇和歌山 八、〇和歌山 九、〇和歌山

一四 真砂 一五 吸江 一六 あいき 一七 憲祐 一八 右近 一九 悠泉 二〇 武雄

八、〇大阪 八、〇藤井寺 七、五寂屋川 七、五堺 七、〇守口 七、〇東子 七、〇和歌山

第十一回

「便箋」三句以内
締切 九月二十五日

投票先
〒593 堺市堀上緑町一ノ三ノ七
藤井二三万
大萬川柳係

川柳塔社常任理事会(八月二日)

連日33度を越す暑さの中で常任理事会が開かれた。十三氏の出席である。
若本多久志氏が常任理事諸氏に「続・老い

の坂」の記念品に對し、内祝いとしての金一封を本社の発展費へ寄付された。
橘高薫風編「麻生路郎」の出版記念を九月七日の本社川柳忌句会に催されることになった。兼題などもすでに予告されているが新し

雅号ぶっちゃけばなし(182)

ふみこ



錦織文子

「ごだい」天皇の忠臣錦織判官の子孫として系図も頂いている姓と、祖父の一字をもらった名前が私の姓名である。競争の烈しかった受験時代や朝鮮内地の教員生活は忍耐努力そのものの三十余年であつたがこの姓名が私を支え私を育ててくれたと思うと私にとつてかけがえのない大切なものである青春時代は短歌ひとすじて同志と共にその趣味に生き戦時中は戦地慰問として短歌を送ったり送られたりして一役かって出入りしたものの出もある。停年後川柳にしたりし仲間入したものは今までも自分の好きな句も魂の入った句も生れない私は今までもそうであつたようにこれからもこの姓名を大切にしていきたいと思います。(元、小中学校教員六十五歳)

NHK川柳募集

課題

「朝食」

川村好郎選

送り先

〒540 大阪市東区馬場町

締切 九月十日

発表

九月二十九日午前九時十五分

ラジオ第一放送(全国放送)

「老後をたのしく」の時間の予定

柳界展覧

原稿締切毎月末

▼生々庵主幹はお元気である。招待された各地の大会にもかならず出席されている。

▼生駒の麻生霞乃先生も八十六歳という高齢だがお元気である。夏きらいの方だが、もうすぐ秋が来ます。

▼日川協全大会の次期開催地は岡山とさまる。55年6月22日。

▼「川柳木馬」創刊号が高知県土佐市高岡町大の場・海地大破方・川柳木馬ぐるーぷから出た。本社から橋高薫風氏が10句寄せている。誌友は年額(季刊)二千元。

▼「津山の川柳」津山市制施行五十周年記念・昭和五十四年度津山市芸術祭川柳作品集が定金冬二氏の選で発行された。特選一席「父の手に纏ては錆びる歳の鍵ほか四篇」土居哲秋」

▼旧「平安」が三派に分かれた「川柳京かがみ」・「川

柳新京都」・「川柳都大路」ともに快調に進んでいる。ご同慶のきわみである。

▼昭和五十四年度・兵庫県芸術文化祭「県民川柳大会」作品集募集・雑誌未発表句(資格兵庫県内在住者または在勤者)一人一句・締切八月三十一日(当日消印有効)発表十月二十八日・会場姫路市民会館。選者の中に本社同人・植村客遊子・遠山可住氏が参加。

▼与呂志句集「地下鉄」・多久志句文集が各誌で紹介されている。川柳わかやまでは六氏が筆をそろえ、傘では磯野いさむ氏が二ページにわたつての書評。深謝。

▼大井正夫氏は、喋る・食う・読む・は大体復調されたが、歩く・がいまだしだそうである。

▼水府忌(八月六日)に生々庵主幹、栗副主幹をはじめ本社同人二十二名が出席

▼岡橋宣介せんば主幹が8月19日急逝。謹悼。

▽同人の首脳部△

▼西尾某氏は動向部で元氣はつた筆頭。したがって本社以外の大会にも引っぱり風である。年齢じやな

い、ガッツだよ」と。

▼若本多志氏も元氣になられた。「続・老いの坂」の内祝いとして金一封、本社へ寄付された。(常任理事から贈った記念品の御礼である)

▼児島与呂志氏も右のような意味で常任理事諸氏に内祝いをおくられた。

▼橋高薫風氏(豊中市)は川柳全集②「麻生路郎」を万代の元不忤阿・持参、仏前に供へ、また生駒の霞乃先生を訪ね、全集の稿料をそっくりそのまま置いて帰られた。

▼前山北海氏(ハワイ)は生々庵主幹のお孫さん二人がハワイへ医学研究に寄られた時いろいろとお世話くださったそうで(P43)、その節主幹へのお便りに、ウイロー社への再出を決定されたようである。

▼伊藤茶伝氏(小松市)木本生風句碑建立記念川柳大会(十月十四日)の選者として出席。会場は憶念寺。

▼本田恵二朗氏(倉敷市)から「学校に休みになると診察室はチビチビ患者で満員になりますので時々雲がくれの術を用いることにしていますと。

構造社川柳全集②橋高薫風編

「麻生路郎へ出版記念

「薫風さんようやった」の会

日時 昭和五十四年九月十五日(祝午後一時開場)

場所 大阪府立労働センター(東区京橋三二五地下鉄谷町線「天満橋」下車西へすぐ)

会費 千円(記念品・作品集呈)

兼題 「だから」 田中博造選

「レモン」 田中好啓選

「遅れる」 岩井三窓選

「情熱」 西尾栗選

「友だち」 西尾栗選

席間 二題・各題二句以内。締切二時三十分

秀句題 呈賞

主催 たいしょうの会

寿馬・泰・鬼遊・千尋・禎・俊平・良・夷一郎・三窓・藻介・薫風

▼香川醉々氏(八尾市)は「俳句公論」五月号へ川柳作品十四句を発表、好評のため更に作品十三句引き続

き提供依頼。川柳啓蒙の一助になるとフアイトをもや

しておられる。なお三見書房刊「数学のつまずき発見

法(図形篇)」と、同(数量篇)が各書店で好評発売中

である。

▼西田柳宏子氏(大阪市)七月十四日にめでたく退院。

▼中筋三幸氏(和歌山市)

から「最近句意不明の川柳が横行していますが、川柳塔誌にもややそれに近いの

でトップ、八月句会では二回目の月間賞と大奮闘であ

高一八〇〇mの宿は涼しくうぐいすが鳴いています。

八尾市高安町北二丁目三五・大路美幸宛。

から「南海電鉄本社食堂内で開催。題は「逃げ場・暗算・投資」

にぶつかります。路郎先生時代からおもうと私たちの七面も少し句風が変わってきたようです。諸先生のご意見をうかがいたいと思いま

▼松下梁水氏から「しばらく休んでいましたが、また勉強させていただきます。

▼黒川紫香氏（尼崎市）から「七月九日から十二日まで水客君と能登半島を一周してきました。海の鳴る能登に面見せる岩（寺香）

▼堺川柳会は十二日（水）六時から「題は・敬老・寝冷え・手続き・並ぶ」摩天

▼東大阪川柳同好会は二十一日六時から東大阪市立中央公民館2F（近鉄永和駅

▼高杉鬼遊氏（八尾市）川柳全集「麻生路郎」へ「薫風氏の片腕として実によく働いてくださった。生々庵主幹が、この仕事は川柳塔が一丸となって薫風さんに協力してほしい」と云われたことがある。それを身をもって実行したのが鬼遊さんだった。本が出来たとき一番目によるこんだのは鬼遊さんだったとおもう。

▼榎谷寿馬氏（伊丹市）は「川柳塔勉強室」を休刊して、新しく「川柳の友」を創刊。この原稿を広く募り近く機関誌発行の予定。

▼笠原吸江氏（藤井寺市）から「長男が居る仙台市へ六日から八日まで来ています。本社句会欠席。蔵子

▼南海川柳部は二十日六時め・平気・ゴミ。

残暑お見舞い★申し上げます

▼板尾岳人氏（富田林市）この人も協力した。九月句会のプログラムのほとんどをお世話についてお願いした。水府忌では吟一氏の選

▼有信新之助氏（大阪市）御岳北海岸から「さすがに

▼菜の花句会は10日（月）夕六時、西郷会館で開催。

八尾市高安町北二丁目三五・大路美幸宛。

から「南海電鉄本社食堂内で開催。題は「逃げ場・暗算・投資」

▼前号訂正「P73の番登歴代編集長に松本波郎氏が落ちていました。おおびし

▼遠山可住氏（兵庫県）から「ささやま三百句記念句会が盛会でした。近く会員句集が発刊されます。一手を引いて引かれて三百段登る「可住」（寄せ書拝受）

▼板尾岳人氏（富田林市）から「日本アルプス上高地穂高で四、五米の雪に囲まれた山小屋にいます。岳沢ヒュッテの住人が「上条岳人」といい、本人には逢いませんが風呂場に「風呂上がり冷えたビール」のうまさ

▼大阪川柳会は二十日六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「明暗・引き締め・平気・ゴミ」。

残暑お見舞い★申し上げます

▼板尾岳人氏（富田林市）この人も協力した。九月句会のプログラムのほとんどをお世話についてお願いした。水府忌では吟一氏の選

▼有信新之助氏（大阪市）御岳北海岸から「さすがに

▼菜の花句会は10日（月）夕六時、西郷会館で開催。

八尾市高安町北二丁目三五・大路美幸宛。

から「南海電鉄本社食堂内で開催。題は「逃げ場・暗算・投資」

▼前号訂正「P73の番登歴代編集長に松本波郎氏が落ちていました。おおびし

▼遠山可住氏（兵庫県）から「ささやま三百句記念句会が盛会でした。近く会員句集が発刊されます。一手を引いて引かれて三百段登る「可住」（寄せ書拝受）

▼板尾岳人氏（富田林市）から「日本アルプス上高地穂高で四、五米の雪に囲まれた山小屋にいます。岳沢ヒュッテの住人が「上条岳人」といい、本人には逢いませんが風呂場に「風呂上がり冷えたビール」のうまさ

▼大阪川柳会は二十日六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「明暗・引き締め・平気・ゴミ」。

残暑お見舞い★申し上げます

▼板尾岳人氏（富田林市）この人も協力した。九月句会のプログラムのほとんどをお世話についてお願いした。水府忌では吟一氏の選

▼有信新之助氏（大阪市）御岳北海岸から「さすがに

▼菜の花句会は10日（月）夕六時、西郷会館で開催。

八尾市高安町北二丁目三五・大路美幸宛。

から「南海電鉄本社食堂内で開催。題は「逃げ場・暗算・投資」

新同人紹介

＝

谷

岡

芳

枝

薫風・一三夫・白江推薦

着分限り「投句先・581

市場没食子
市場力ネ女

共著「夫婦」

美装箱入・1192句
363頁・頒価千円・
(干共) 今秋発刊

残暑お見舞い

西宮北口川柳会

代表・若本多久志 幹事・朝山千世子

西宮市両度町・西宮中央公民館

本社 八月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

省エネへ追い討ちをかけるように熱帯夜がつづく。そんな中での句会である。よっぽど好きでないとしてこれられない。

会場には川柳全集②「麻生路郎」橘高薫風篇と島居百酒著「比島戦線従軍記・白い歯」若本多久志著「続・老いの坂」が積み重ねられ新書の香りもこころよい。

柳宏子さんが元氣になって退院。やはりこの人が句会にいないときびしい。

「心配をかけました」と挨拶したあと、「首から上の病氣は耳鼻科へ行くことです」と体験を語る。雨に打たれて顔面神経痛になったそうである。病魔はちよつとの隙き間からやってくる。

戸田古方氏の柳話は「川柳と美」に、つながらるので、氏独特の内容だった。これを説明するにはスペースがなく、稿をあらためて本誌に載せたいとおもふ。

最近氣のついたことに、女性陣の出席が減

ったことである。やはり暑さからだろうか。句会の花は、なんととっても女性群である。女性群で月間賞も狙ってはいいもの。

八月句会の月間賞杯は好調板尾岳人氏にかがやいた。これで二回獲得者が中島生々庵主幹と板尾岳人氏になった。あと四回が勝負となる。その内に誰かが割り込んでくるであろう。興味は十二月句会までつづくことも楽しいことである。

(受付・児島与呂志)
(進行・西田柳宏子) 記録・高杉鬼遊

出席・与呂志・古方・葉平・喜風・万里・水客・勝美・紫香・右近・川狂子・太茂津・きみ・英子・道夫・雅風・百酒・作二郎・育園・萬的・憲祐・潮花・蘭・三十四・綾女・寿馬・形水・規不風・桐下・一三夫・薫風・岳人・柳宏子・誓二・恭太・度・天笑・柳伸・酔々・弥生・文秋・翠光・葉・英千子・頂留子・恒明・好郎・寿子・みずは・多久志・瓢太・凡九郎・涼一・雀踊子・庸佑・鬼遊・小松園・葉子。

席題「後押し」 島居百酒選

後押しをすると人間走り出す 紫香
ママの眼に後押しされて病んでいる 水客
運動会後押ししたい子の遅さ 雅風
振り返って見れば後押し居らなんだ 瓢太

勝美 後押しのヒップは大きく揺れている
古方 金だけでない後押しが要りそうで
右近 後押しの妻を叱って越えた坂
庸佑 ライバルの後押しあまりに強すぎる
みずは 後押しに頼る力が出し切れず
形水 圧力という後押しが控えてる
英子 裏判が光り再起の靴をはく
右近 後押しの顔が恐くて手が出せず
古方 ご先祖の陰徳後押ししてくれる
頂留子 後押しをして共犯に名を連ね
葉平 後押ししなせと文言うてくれ
潮花 大物の後押し悪へ手をつける
度 栄光の座で後押しが煙がられ
頂留子 後押しをしながらメリット考える
酔々 七光り消えて後押し居なくなり
喜風 旗色を見てから後押し姿消す
岳人 谷町の坂で後押しした社長
紫香 肩書の通りに後押し効いて来ず
万里 後押しを引受け会社のつとめる氣
恭太 履歴書に議員の名刺乗せて来る
庸佑 後押しと後押し裏で火花散る
規不風 後押しがいるのを本人知ってない
雀踊子 後押ししの知恵をかりて電話口
蘭 親会社のコピーと燃りて立直り
桐下 子にだけは後押しさせぬ夜泣きそば
一三夫 後押しがタカ派喧嘩が燃え上がり
柳宏子 後押しの方がへばったあとと一歩
雀踊子 後押ししの妻に明日のある屋台

栄冠へその後押しも泣いており
後押しができたか前言ひるがえし
好 郎 百 酒

席題「知恵」 墨 作 二 郎 選

知恵の輪にババが本気になつてくる
知恵の輪が解けずに猫と寝てしま
潮 花 文 秋
年寄りと子供の知恵を借るクイズ
妻は妻子は子の知恵へ工夫する
柳 花 子
パン屑へ蟻ゆずりあう知恵を持ち
終生を神のまま居て知恵遅れ
桐 下
鳩の目に知恵の点でも負けそうな
騙されて男を騙す知恵がつき
みずほ
お知恵拝借とは格好の良い言葉
鬼 遊 薫 風
知恵と言つものをしとくことがない
凡 九 郎 栗
別室で女将の知恵を借りてくる
三 十 四
本当の知恵者うしろで立っている
恭 太
花盗人の小さな知恵を見せられる
水 客
風当り宙ぶらりんの知恵になる
恒 明
善人の知恵で悪人計られぬ
綾 女
回転扉知恵なんか湧くはずがなし
道 夫
眼をつむる知恵をだんだん身につける
水 客
子の知恵を借るさびしさを口にせず
好 郎
知恵づいて孫ばつばつと遠ざかり
英 子
知恵のない男が歩く法善寺
岳 人
凡人の知恵で足踏みばかりする
き み
からっぽの知恵を引き出すつれがある
柳 伸
神様の知恵夏ならば夏の花
度
知恵の輪を買つて来たので電話する
岳 人

噴水を見つめる知恵が湧きそう
忍び屋敷の知恵はカラカラ笑えま
道 夫
怒きさむことも女の知恵である
作 二 郎

兼題「定規」 滋 重 氏 代 選 河 内 天 笑 選

ヒョットコとオカメにびたり合う定規
お役所にある前例という定規
桐 下
三角定規の丸い穴から鼻を出し
恭 太
苦勞人雲型定規というまる味
鬼門には触れぬ定規を父が持つ
憲 祐
清貧の誇り定規手離さず
規 不 風
時折りは生活に定規あててみる
好 郎
他人様の事なら計る定規持つ
多 久 志
カマキリは定規のルーツかも知れぬ
凡 九 郎
神様の定規に目盛など要らぬ
英 千 子
未来図を描いて定規を弄ぶ
太 茂 津
母だけの定規で父の気に入らず
与 呂 志
三角定規の丸い穴にある思案
栗
三角定規で男はマルを描きたがる
水 客
古くとも父の定規は狂つてず
好 郎
とても遠い定規と心やすくなる
作 二 郎
箆竹は命に線を引く定規
憲 祐
定規いちいち当てて大小屋片ちんば
静 馬
雲型の定規で裸婦を描いてみる
鬼 遊
頭うってだんだん円くなる定規
弘 生
結婚へ父の定規が丸くなる
寿 馬
定規持つ男が歩く法善寺
岳 人
定規信じないうるさい奴が居る
恒 明

定規スレスレ女半裸でカッポする
トレースに定規生きてるよう動く
浮世旅定規で何を計かりはる
俺の線引くの定規など要らぬ
三角定規の底辺に住み逃げ出せず
石橋へ定規で線を引く男
線を描くと定規は未来へ歩き出す

兼題「灯油」 高杉鬼遊選

悪い奴灯油を抱いて昼寝する
愛の灯を点す灯油が見当らず
上がるだけ上がり灯油へ夏の汗
灯油不足故郷はいいな炭を焼く
煉炭があります灯油を笑う母
ローソクに負けた日もある灯油の芯
人類のおごりとがめに来た灯油
又オイルショックでつかとおばあちゃん
灯油ここ掘れと教える犬もいず
灯油が消える竜馬に死の予感
三浪にさせたくはなし灯油貯め
家計簿の冬に火がつく灯油高
灯油食う怪物だんだんでかくなる
ボンボン船灯油の音が朝にする
仏壇の灯油が切れて遺産もめ
千円の灯油素人として覚悟する
親類に油屋があり不安なし
神殿の中まで灯油つまつてる
暑い日の灯油値上げは人ごとで

万里 綾女 凡九郎 小松園 憲祐 醉々 大茂津 一三夫 寿子 英子 早苗 優 度 榎 水客 涼一 好郎 憲祐 弘生 水客 恭太 小松園 多志 花村 柳伸

兎小屋から灯油までとりあげる
灯油不足今年は寒い冬になる
ヒロシマのかくし砦にある灯油
灯油あかあか約手の不安見てしまふ
灯油のない暮しに戻れない家庭
階段の数で灯油の配達料
酒瓶に落日灯油が入れてある
徳利を提げてマメダも買う灯油
月の砂漠で静かに灯油遊んでる
風鈴よ灯油不足の風ばかり
果し状のように灯油を売ってくれ
灯油買う金を溜めてる兎小屋
灯油値上り今年の風へ風邪薬

兼題「橋渡し」 岩本雀踊子選

度 雀踊子 作二郎 幸 文秋 登美也 憲祐 一三夫 寿子 作二郎 水客 みずほ 鬼遊 千代三 どんたく 登美也 枯梢 恒明 鬼遊 喜風 育園 太茂津 古方 育園 与呂志

岸和田市文化祭参加

第29回市民川柳大会

日時 昭和54年10月14日(日)

十二時半〜十七時

会場 岸和田市民会館地下会議室

柳話 川柳塔社主幹 中島生々庵

兼題 「這う」 深日白光子選

「逃げる」 菊沢小松園選

「退屈」 八木摩天郎選

「花道」 榎本 聡夢選

「ぜいたく」 西尾 栗選

「なさけ」 高橋 操子選

席題(当日二題発表・兼席題各二句)

呈賞 市長賞、議長賞、教育委員会賞、文化協会賞、岸和田川柳会賞

締切 十四時(出句は出席者に限り)

ます

入選句集代 三〇〇円

主催 岸和田川柳会

後援 岸和田教育委員会

岸和田文化協会

〒596 岸和田市土生町一九八九一八

高橋操子内

岸和田川柳会

電話〇七二四二〇〇四九

欲の無い善人がする橋渡し
橋渡しのうまい男の祝唄

与呂志 栗

ロッキード裏献金の橋渡し

等 又

橋渡しはしても責任迄持たず

瓢 太

橋渡しすんで人形の家を出る

弥 生

橋渡し汚職と知らず巻き込まれ

綾 女

根負けをさせてみつつた橋渡し

翠 光

一枚の絵を踏まねばならぬ橋渡し

栗

お日柄の良い日を選ぶ橋渡し

桐 下

翔んでいる女にかけの橋渡し

潮 花

橋渡しまでに捜査の手が伸びる

庸 佑

まっさきに墜ちる橋渡しの女

道 夫

橋渡しできぬ死角に生きている

醉 々

六法は罪にしない橋渡し

規 不 風

虹かける一人の女は振り向かぬ

鬼 遊

橋渡しの好きな鳩にはだまされぬ

雀 踊 子

橋渡し骨折り損の汗をかき

兼題「形式」

大坂形水選

定退の門形式を脱ぎ捨てる

弘 生

形式を役人かくれ蓑にする

静 馬

集印をすませ形式に拌んどく

登 美 也

形式で押したはんこが斜向き

幸

嫁がせる日の形式に負けておく

千代三

形式の借用証書だけは取り

好 郎

形式を飾り家裁の個室出る

桐 下

形式の喪服が暑い夏の義理

憲 祐

形式の奥で心はいくさする

寿 子

形式はきんきらきんの中身空

小松園

二ヶ月の胎児が形式叫んでる

き み

形式を破つてあわや村八分

英 子

形式をふまえ横やりきさいれず

多 志

形式をいわんさかいに親しまれ

育 園

形式は夫と言う字先に書く

古 方

山開き形式だけの胡摩を焚き

花 村

形式へ長男だけを縛りつけ

萬 的

形式は嫌い右手で持つフオーク

一 三 天

お役所の形式善意の芽をつぶす

恭 太

形式を変えたら雄兵踊り出す

栗

形式のキャッチボールをする家風

柳 宏 子

形式をまじめな顔でぐぐり抜け

弘 生

形式を整え案山子が歩き出す

天 笑

形式は俺がつくると風雲児

寿 子

形式を越え鎮魂の流灯よ

み ず ほ

形式的なふるさとがある鳩時計

醉 々

形式を千年囃すコンチキチン

醉 々

形式は古いが父の背広着る

作 二 郎

形式の筆では母を描けない

憲 祐

(河井庸佑整理)

形式の筆では母を描けない

岳 人

形式の筆では母を描けない

形 水

昭和54年度 大阪文化祭

第31回 川柳大会

日時 昭和54年10月21日(日)

午前10時開場・午後1時締切

・開会

会場 中央公会堂(3階小集會室)

地下鉄「淀屋橋」中之島公園内

講演 「鶴林寺の来迎壁面」

兼題 大阪市立美術館長 岡崎譲治氏

「時事雑詠」 広瀬反省選

「御堂筋」 西村芳川選

「ベッ ト」 米沢俊夫選

「雲」 前田英巳代選

「中 流」 堀江としを選

「人 氣」 西尾 栗選

席題 当日4題発表

出題 各題2句(締切1時) 出句は

出席者に限ります・(兼題・

席題共、当日会場で受付)

賞 席題・兼題とも秀句に、府知

事・大阪市長・府・市教育委

員長から「川柳賞」選者から

「選者賞」を贈呈します。

句集 入選句集代三〇〇円、当日申

込受付

主催 大阪府・大阪市・大阪府教育

委員会・大阪市教育局

協力 各 柳 社

協賛 日本川柳協会

老地物語

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳わかやま

津田

与史報

ふんきりをつけて男の顔になる
腹割って話せば平らだった道
もう叱る事もなからう娘は嫁ぐ
自画自讃そこにルーツを持つ笑い
ふんぎりの切れ愛する子が宿り
会えば又ふんきりつかぬ未練坂
一言へふんきりついて開いた窓
満腹になれば忘れる仏の掌
腹割って見れば鬼ではない相手
腹黒い男笑顔を絶やさない
悪と悪虚々実々の腹と腹
腹巻の金がお宝つて今日の汗
もう一言腹を知りてついで行く
嘘叱る美し過ぎるではないか
この歳で叱ってくれる母が居て
子を叱る言葉が切先向けてくる
叱正の横糸人生織り上げる
夜の部屋脱いだ仮面が笑い出す
生真面目な父の道化を笑えるか
負け犬の尻尾に嘲笑絡みつく

雀踊子 善太 としよ 凡九郎 勇太 光代 公子 千寿子 武雄 英子 天彦 裕美 紀美女 太茂津 紀久子 緑楼 三男 幸子 和子 式

川柳ささやま

河原みのる報

焼いた世話無料ばかりかおこられる
入場無料ただ見るだけの個展
毒花と知らず無料の蜜を吸い
齢上が煙たがられて平でいい
即答をかわし煙草に火をつける
煙の輪雲に描いて阿呆になる
裏表見せて煙にする奇術
洗い張り手まめな母はきれいに着
口紅が洗い落とせたと案じ
耐えるだけ耐えて年輪皿洗う
みち足りて女は髪を洗わっている
明日の日を信じ深夜の汽車洗う
美女が脱ぐときめきに似て複線化
廃線の涙で複線生かされる
人生に複線が無いから道
川柳しんぐう 川上 大輪報

近郊 緑村 孝 文平 素水 ゆう也 百合子 テル 可住 千代子 越山 凡志 ひか平 宗珠 一孟 大輪 勇太 大輪 輝寿 雀踊子 すみれ 希久志 武雄 富子 まさ子 十郎 冬花 公子 式

金回りのひけつ探るのも他人
断絶の兆野菜罐詰離乳食
ベランダで作った野菜も旬の味
手作りの野菜形はいびつでも
空箱に野菜故郷を遠く住む
父の日も代役のない朝の靴
京都塔の会 松川 杜的報
空の冷えた花芯にあつめ芭蕉
あじさいは雨に濡れてるのが似合う
灯を入れて古老寺伝の事に触れ
草千里自分が小さくなる眺め
寺巡り数珠持たぬ手を合わしとく
薨を煙べて昔話の桜餅
飾らない言葉で女中が行き届き
いびられた通りにいびる姉芸者
いびりつ子ある日一人で遊ぶ砂
美しく育ち醜女にいびられる
正直な消しゴムで嘘が消されない
消ゴムで消したいような記事ばかり
ぼたんの寺裏方さんにも来るマイク
指切りの二人へ入り陽美しい
人柄の良さ消しゴムは丸う減り
御無沙汰の文字消しゴムに詫を入れ
すりへった消しゴムだけが俺を知り
答案の出来ず消しゴムもてあそぶ
川柳たけはら 森井 善居報
百年は生きず老いばれまいぞ妻
さんさんと輝く孫の宮詣り
父という重さで少し胃が痛む
春の流れ漂つものに国なまり
まけるかなやつてみなけりやわからない

とよ子 千寿子 三男 澄孝 よしは 幸 和友 美穂 杜的 飛鳥 芳芽 求香 紫史 誠石 王石 潮花 水客 三求 萬代 明代 白溪 笛珠 弘三 俊三 静水 房子 蘭幸 紫光 小直美

とつくんがすんでおなかかグーとなり

笑子

ひやかかな気品の中の桐の花

寛子

雨ボタリボタリドロップスになあれ

鈍舟

奇なりとも確かな定めと思ふ日々

敬子

Gパンを脱ぎすてらしく座す茶席

青居

今の内ですネ親子のシャボン玉

不朽

人の眼をおろそかにせぬ野の仏

一路

さて次は何をする気の黙秘権

節夫

雑草が挑戦状を突きつける

鬼焼

逢えそうなきがして赤い靴みがく

政己

駄馬なり口惜しい思いの日が暮れる

秀夫

新米のパバ○○○をもちあまし

かつこ

片目ダルマに夕日まつわりつく不惑

英詩

深呼吸吸いぬの老父に風薫る

かつ子

聞きながす事にもなれて丸く生き

のぼら

民衆という石ころのうめき声

恒松

川柳塔まつえ句会

町紅報

そのわりに中味の軽い内祝

虎秋

内祝白寿の福を分け歩き

千代

手をとって孫と書いてる一二三

美佐

内祝配り病と縁を切り

美世

良心に背く署名の証言台

伊都

名が書けた孫の便りを見せ歩く

寿美子

0才の名前でとく内祝

三和

内祝配り忘れた嫁の実家

みる

心配はまだ残ってる内祝

舞吉

濡れていい覚悟で走る俄か雨

登美也

トンネルの向うに悪魔踊ってる

孤呂二

手加減で書くとき盛夏はきびしけり

町紅

川柳大阪

児島与呂志報

バラ色で膨らんで膨らんで嫁く

笑風

捨石が勝負所で動き出し

鉄心

庭の隅小鳥を埋めた墓がある

弘生

おとなりの夕餉が洩れる換気扇

久電子

故郷の香りできしむ汽車の棚

君枝

幻想の世界大台ヶ原は晴れ

徳松

石庭へ凡夫悟った顔で座す

本蔭棒

連休の運び屋となる新幹線

道子

風一つ新幹線を止めにくる

天平

いつ着ても久留米餅の藍が冴え

誓二

新入りの意見で牙城揺れ動く

秀峰

大阪で五十年まだ阿波説り

三十四

両の手に孫の温りこぼれそう

洛醉

ぼんやりとしてたら肩を叩かれる

喜醉

添い寝する本読む母の声やさし

佳加志

倒産と隣り合せに生きた日々

希久志

故郷があるお隣りからおすそ分け

比呂志

下駄はかめ暮しに慣れて日本人

真佐志

主役ふと我に返ってけつまずき

与呂志

どんぐり川柳会

史好報

みずの子一人で旅がしたくなり

真砂

色即是空 汗は自然に流すもの

酔々

敏感な男と女やけどする

鎮彦

あいまいに言おう助かる人がいる

憲祐

あいまいな愛の糸とは気がつかず

サヨ

みみずの死 頭も東尾も東

薫風

武器のないミミズは深く地に潜る

鬼遊

一言に死を考えるおそろしさ

勝美

あいまいな男が座る四畳半

岳人

俗界の騒ぎをよそにミミズ住む

喜風

割勘を敏感に聞く平社員

雅風

すねにきず持つてる男は敏感よ

万里

人見知りする子ミミズをこわがらず

史好

奥谷

弘朗報

灯が点くとチップで泳ぐ顔となり

登美也

連れて来てやりたい旅の湯が溢れ

観洋

外孫の声を晩酌聞きたがり

舎人

人生のたそがれ下取りもう効かず

銀糸

時折りは孤独を捨てて来るベンチ

紫泉

駆引きの出来ぬ育ちの良さを見せ

おさむ

定退の重荷おろした鉢いじり

律子

寒の餅誰にともなく掲げておく

軒太楼

人情の深さも過疎の人にふれ

千重子

生活の灯守るおしやれもあつてよし

夕路

駆引きのうまいところを利用され

独歩

柳風

佳句地10選 (前月号から)

高杉鬼遊選

雨の日は軍艦マーチの処に居る

恒明

唐草模様が子供心に恥ずかし

史好

雨模様言いたいことはたとある

小松園

指名解雇された男に五月晴

鐘堂

家を取り巻く音に馴れてくる

久米雄

風はみどりうつつに愛を考える

節子

春愁の帯といたたま昨日今日

不朽

実家の味いつしかよその味となり

葉津子

歩道橋いつも不平を聞くばかり

満津子

順を待つ時間程には診てくれず

良京

駆引きのない妻だから腹をわる
やれ値上げ気分の晴れぬ事ばかり
社会科に駆引きのこと書いてない
負け将棋王が重荷になつてくる
六畳にいても城主という気分
再婚へ重荷となつた子の寝顔
おふくろの味に一家がささえられ

南海電鉄川柳部(大阪市)辻
ストの日はタイムカードも今日は閑
タイムカード御苦労さんと言いたそう
タイムカード他人が打つたをはがゆがり
云い訳もタイムカードに通じない
タイムカード規則正しい人と知り
迂り込みタイムカードもいらいらし
タイムカード要らぬ務めの爽やかさ
ストレスをタイムカードは知つていた
ガチャとカードこれで日給になりました
延着証明タイムカードへ胸を張り
タイムカード白魚の手も捺している
過去の傷父いつ迄も母に負け
証言とうらはらに出た手のふるえ

水主報
御前 碧水 碧なと 石花菜 日満 雄々 弘朗 摩天郎 小松園 圭水 柳伸 千代三 雅風 維久子 宏子 美乙女 勝美 川狂子 川ツエ 季美 水報 亜成 光男 貞彦 松尾 博泉 信楽 千夢 一扇 みどり

休日の机は大きく欠伸する

放流の稚魚この川を忘れるな
主役の座降りて机も整理され
半分しか見せないショーで客を呼び
退職の机に置かれた花一輪
流れから外れて蝙蝠低くとぶ
生々流転男は明日に賭けつづけ
半分は口でまどめている商談
知恵の輪が机の上に解けぬまま
判を押す書類を溜めている机
水に流そうそんな逃げ道だつてある
日本列島を流れたしわを持つ女
今年こそと思うばかりで折り返し

南大阪川柳会 中川
親だけは どうにも騙せない狸
こちらも狸騙すのは慣れている
背広の下にしっぽかくしている狸
狸寝入りへ妻の湯が長すぎる
頼りない自立をかばう七光り
千仞の谷から自立はいあがり
押す屋台そこから自立の足がかり
自立とは母に淋しい響き持つ
学歴を聞く口は口ほど動かない
おらが村先生と和尚へ問いに行く
アイデアを拾いに喫茶の隅に居る
ぬるま湯の暮しでアイデア育たない
アイデアの誤算故障がすぐに出る
肩張った背のび足からくずれ出す
境遇の似た者同志寄せる肩
風切つて歩くと肩はいかり出す
ワテンポおくれて丁度ウマガ合う

雅登 幸坊 聖地 一念 野生 形水 弥生 入仙 好郎 智子 誓二 節子 久子 柳宏子 度美 勝美 英子 千代三 雅風 蘭 滋雀 君子 文秋 憲祐 柳伸 恒明

晩鐘がそのとき鳴った瀬戸の海
丁度その時どんな話を始めよか
いずも川柳会 板垣 草丘報 醉々 凡九郎 軒太楼 多賀子 耕草 草丘 早苗 はじめ きみえ 虎秋 水煙 シマヨ 勝水 流石 正江 可保留 嘉寿子 雀村 功 独仙 緑之助 岳詩 秋月 実男 奮水 越山 紅月 永楽

世直しに効く洗剤が見当らず
痛くない腹探ぐられる不信心
他人にやる荷を運ぶのに祝ひ唄
運んでも祝儀が出ない離婚の荷
玉砂利を踏めばこだまとなるしじま
毛糸玉ひざにころがし黙秘権
家紋入り運ぶ荷物を山と積み
証言に自民びいきも腹を立て
滅反に洗う農機も疲れ果て
エネルギー文化と共に使い過ぎ
腹を切る覚悟ポストに就任す
西部劇夕日に映えて馬洗う
厚情に心の奥を洗います
念を押すことで十円玉が切れ
筆運ぶ土曜の午後の気安さに
洗っても汚職の罪は落ちません
満月をくずし小川に鋤洗う
玉の奥秉てて職場を唸らせる
虫を曳く蟻をしばらく見ていたり
川柳化粧箱 植村客遊子報

恒明 鎮彦 柳伸 憲祐 文秋 君子 滋雀 蘭 雅風 千代三 英子 勝美 度美 柳宏子 節子 誓二 久子 柳宏子 度美 勝美 英子 千代三 雅風 蘭 滋雀 君子 文秋 憲祐 柳伸 恒明

賛成とみたか内幕打ちあける
貧乏は馴れていますと笑うだけ
刷毛で塗る白髪に孫がまだおらず
陽の当る芝は日長に差をつける
貨車の愚痴今日も空車で走らされ
わらび取る子等へうぐいす近う鳴き
磯の香に佇てばふと貝拾いたく
杖たより吹雪の津軽替女の影

珈琲をこよなく愛し茶の師匠

城北川柳会

川口

客遊子

弘生報

靖国の神にすまないことばかり

鬼遊

日の丸を見ると捨身になる男

恵美子

捨身にはまだだれぬ欲がある

なりこ

全身でぶつかる誠実さを買われ

満津子

捨身にもなれず恋しい夜が続く

としよ

また一つ捨身の槍が残つてた

道子

妊つて母性捨身を覚悟する

弘生

寡婦の名に甘んじ子等に賭ける日日

右近

子育てに捨身の母は眉を描く

ふ子

子を捨てて程の苦しみなき平和

喜代子

春斗にハト派クループ妥協し

喜洗

強気のママが氣をもむハト派の息子

千子

ハト派なり世界平和を夢に見る

秀村

ハト派にも不況の風がからみつき

テルミ

無所属の議員はハト派に腰をすえ

人美

五月病味の味噌汁の味こいし

三十四

瀬戸内を初めてまたいだ五月晴

ますえ

捨身にて子を介抱し病癒ゆ

タキ

捨身なる母の姿は子の鑑

きくみ

駒つなぎ句会

里

うかつにも相手に心よみとられ

小路報

飲む程に本音がわかるビヤホール

美乙女

見せかけの男の髭がむし暑い

宏子

菌ごたえが一つ若者から返える

美代

借り傘をどこに置いたか雨あがり

白兎

他人には測り知れない指の技

育園

指つめるそんな度胸など持たぬ

酔々

頼寄せてえとこなの歯が痛む

凡九郎

声のする方は避けとく遊歩道

恒明

柳伸

柳伸

本場の事は大声では云えぬ

みずほ

綾とりの母子の指は対話する

綾女

細い指自慢へ稲の穂は垂れず

雅風

針を持つ未だまだ確か母の指

勝美

泥棒と叫んで泥棒逃げてゆく

小松園

指を咬む犬が加減をしている目

規不風

声援もむなし砂だけ持ち帰えり

雀踊子

腹の立つ声もあろうに地蔵尊

千代三

見せかけが売れて本物あわて出す

弘生

口をあくだけで痛む歯を抜かれ

はや下

堺川柳会

河内

陽気すきお通夜に向かぬ父の顔

天笑報

離れて下宿へ愛の定期便

東雲

七十年歩いた道にまだあきぬ

敬三

親の金あてにせぬほど子が育ち

ミツエ

白バイにつかず離れず見守られ

笑痴

子離れて親脇役として生きる

天笑

子供が目こんな恐い不信の日

清女

堀ひとつ離して程よいお付合い

邦晴

切り札を四五枚持つてゐる陽気

千子

現実へ夢失われぬ歩きぶり

宏子

成長の子供に狭い子供部屋

育園

披露宴子供頃もすっぱ抜き

摩太郎

源氏名の陽気な顔は作業用

与一

心臓の鼓動聞える至近距離

小松園

うみなり川柳会

小林由多香報

十六夜の月が傾く花水

吟月

花水の花ははじらうこともなく

葉士人

花水の花は虚勢のままで解け

洋々

花水のメルヘン遠い夢にふれ

熊生

路郎師句碑建立三十周年記念

第31回 西日本川柳大会

とき 昭和54年9月9日(日)

ところ 久米南町下弓削

久米南町中央公民館

柳話

川柳塔社 中島生々庵先生

兼題

鏡、舞台、子、楽しい、明日、記憶

選者

橘高 薫風(大阪)

席題

奥谷 弘朗(倉吉)

特別課題

平山 繁夫(神戸)

投句

水粉 千翁(倉敷)

特別課題

土居 哲秋(津山)

席題

谷川 醉仙(久米南)

特別課題

※敬称略

投句

各題2句以内、タテ22センチ、ヨコ4センチの句せんに1句ずつ明記、裏面に推号を書き、9月5日までに弓削川柳社あて。出席者は、当日11時までに所定の句せんで。

会費

出席 千円(発表誌、昼食呈)

呈賞

投句 七百円(発表誌呈)

主催

岡山県知事賞ほか総合成績で

主催

弓削川柳社

九月の本社句会の兼題を変更し

ました。

六四ページをご参照ください。

(予告した兼題は十一月の本社句会へ
回わします。

披露宴果てて夫婦に花水

一あたり訓示がすんで海に散る

肩書きも地位もないから苦勞もない

成績はどうあれ子供に夏休み

南無称えめつきり重い児がはしやぎ

肩車めつきり重い児がはしやぎ

はおすきもめつきり赤く盆近し

サーフィンの群れだけ残し土用波

土用うしの日カバ焼やめてかしわ買う

土用干し着物はあの汗知っている

土用干し入道雲が動かない

前からも見たい目をひく後ろ髪

前後策決めて出直す靴をはく

新記録樹立の背中狙われる

後ろにも視線を感じず初勤め

あきらめたうしろ姿は肩で泣き

和歌山七面句会

一言が壺を押さえる委員長

連絡のない日がつづくジンフィーズ

憎い人軽い会釈でやり過ぐす

二号にはちゃんと軽すぎる紙袋

おもわくにちと軽すぎる紙袋

軽い気であつた世話役難航し

昌三

正

銀嶺

無人

貞山

吾朗

とし江

おさむ

華子

一汀

豊生

笑王

富美子

盛桜

善堂

由多香

三幸報

富子

幸

隆史

フクコ

秀雄

葉津子

連絡を待つてゐるうちはまだ信じ

氣に入りの壺に泰山山映えて

骨壺が口出しそうなかたみ分け

壺はすす話も聞けて出世する

空な母の残せし梅の壺

身軽だが孤独が常につきまとう

金銭にかかわる連絡念を押し

大川の峠茶屋より連絡船

方言を乗せて小島の連絡船

前髪にあたり軽く罪揺れる

壺ばかり部屋にも庭も壺法師

民族と共に滅びた白滋壺

まだ金があるのか連絡何もし

貴婦人の軽い眩まいがドラマです

壺並ぶ漢方薬の字が読めぬ

東大阪川柳同好会

舌で鼻紙めるおかしな芸をもち

利酒の舌でころばす灘の味

舌ざわり良い絹ごしの好きな父

いいわけの舌が人間小さく見せ

証人の舌はくるくる水車

政治家の舌は釘抜きでは抜けぬ

スクラムが怪しくなった仲間割れ

スクラムの紅一点が活気づけ

頭から足まで一流という身づくろい

一流とうぬぬれから芸が落ち

骨董の価値とも知らず軸を売る

甘い点つけて円満な夫婦仲

焦点をそらす言葉に母が疑念

野良犬と遊ぶ子供に母がいない

正直にうつる子供の瞳がこわい

朱三子

和美

智水庵

ひろむ

二咲子

わか

勇次

世津

晶子

寿子

光治

周穂

宣子

隆恵

三幸

慶三

弥山人

綾女

度

東雲

孤舟

千代子

かずを

三十四

文秋

喜洗

弘生

頂留子

勝美

雀踊子

一流も猫に小判の抽象画

スクラムの中心の父信じよう

一点を見つめ男に明日がある

川柳高知

川竹

松風報

麗子

青果

十面子

芽十

朱坊

三吉

蟠蛇

登

桂緑

海州

紀人

たかし

とみ子

菊野

恭一

節子

よしみ

克子

松風

虹川柳俱樂部(唐津市)新岡回天子報

九億田中佐藤もひきあい

サン格拉斯は賢母の割烹着

苦勞した様にも見えぬ後家の店

いざとなりや捨身覚悟で徒食する

客見せる水着が気になる客間かな

補導の目髪型の変化見逃さず
六連星
春吉
義美
久仁於
勝一
実
醉々
鎮彦
湖風
松風報
麗子
青果
十面子
芽十
朱坊
三吉
蟠蛇
登
桂緑
海州
紀人
たかし
とみ子
菊野
恭一
節子
よしみ
克子
松風

医師の子と小学生でも分る所作
忍ぶ丈け忍び桂馬は身構える
鞭よりも母の言葉が身にしみる
兇悪犯人の父母になつてみる

川柳後案(岡山市)

井上柳五郎報

下心酔わねば云えぬ気の弱さ
下心あつて少しも酔つとらず
中元の品に包んだ下心

三井ヶ丘川柳会

高田 博泉報

さりげなく手土産を出す下心
下心その手は古いと先に読み
肚からの笑いに白い歯がこぼれ

原爆被災国原子発電動いてる

正彦

使い捨てのオシメを抱いた赤い爪
使い捨て明治の顔ににらまれる
使ひ捨て情容赦のない運命

萬の的

萬の的

出しやばりが満座の中で恥をかき
出しやばりがあの席この席顔を出し
出しやばりが人の買物値切つて

隆子

隆子

出しやばりが言っただけあつて腕を持ち
出しやばりが奥の広さにうろたえる
出しやばりが特種らしく来て話し

博泉報

博泉報

酔いさす温泉芸者が見てた雨
卵としの白魚つ字くの字なり
改菜のあおり紫陽花咲かぬ庭

青波

青波

一寸の虫圧力に耐える貌
原爆被災国原子発電動いてる

正彦

掬治
虹汀
一竿
回天子

梁太

哲郎

秋月

住治

佐加恵

幽谷

胡風

鮫虎狼

宏太

草風

久米雄

昌吾

柳五郎

元一

ひろし

廉

恒洋

たけ志

博友

萬の的

よしひろ

隆子

青波

正彦

ことさらに雑草に降る雨がある
十五センチ赤い長くつ雨がすぎ
雨を待つカバンの中の傘重し
雨あがり雀あじさいの私語を聞く

脈搏の音に合わして雨落ちる
我が墓に粋な女の泣く夢見
背の君へ未来永劫愛一つ

圧力がかかれば女員になり
未来から醒めた男の朝のお
圧力に馴れて五十の宮仕え

五十年前はまさしく杉の子で
圧力にさからい蓮の花開く
純白のバラが真紅になる未来

過去未来その最中に居て迷い
海女の桶波にゆれつつまっている
眼の焦点ははるか未来へ向いている

未来迄伝の光変らない
過去は未来未来は過去になる輪廻
笑みひとつ女の圧力には勝てず

未来をは見んと軸先に立ち続け
勝山双葉川柳会(大阪市) 河野君子報

亡き母の面影がある故郷の駅
梅漬ける母雨の日もいとわずに
色褪せた夫婦にはしい燃えるもの

駅を出た頃から花束邪魔になり
人の顔も童顔になるクラス会
人生模様えがく列車に乗つてみる

待ちぼうけ駅の時計がうるんでる
いさかきも田満のうち新家庭
田満は顔で男に運がない

田満は小さな母を軸として

光夫
琴音
三郎
あいき

形水

雅洋

晴風

てまり

一念

亜也子

古方

度

三千子

野生

英壬子

博泉

勝美

亜鈍

眉水

蕙風

千世子

キミエ

千里

英子

田鶴子

利代

祐子

千代子

久子

静香

燃えるだけ燃えて夕陽は風を呼ぶ
始発出て大大阪が動き出し
逢いたさに駅までの距離駆け抜ける
田満な顔で一癖ある男
愛の鎖つけて改札口通る

菜の花句会

戦いのどよめきを聞く塩袋
古代文化ヤッパリどれい血のうめき
塩踏んだ日の焼香にある決意

運ばせてだ運賃を値切られる
狭い日本なのに犯人また逃し
植えられた鉢で生命をのしる植木

狭い庭薔薇は大きく咲きました
古代より男が祭りに笛を吹く
給料を運び終えれば孫の守

一言が過ぎたんだだけ狭くなる
風向きを大きなヒップで変えられる
落とす穴までは調子のよい運び

立つて待つ狭い飯屋がよくはやり
運んだらくれる千両箱担ぐ
なめくじが涙と消えた塩の中

豆腐屋のラッパがぬける狭い路次
運送屋決める荷物と知っている
男ひとり青い魚に塩をふる

嫁の家へ何かにつけて運ぶ母
古代史に載らぬ夫婦の汗みどろ

島居百酒著 比島戦線従軍回顧録

「白い歯」

好評発売中!

発行所

構造社出版株式会社

定価千五百円

美幸

綾女

酔々

糸葉

夕花

鬼遊

秋美

重善

弥生

幸生

昭子

岳人

豊子

凡九郎

頂留子

柳小園

雀踊伸

紀美代

あいき
俊子
智子
節子
君子

鬼遊報

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

高杉

本社川柳忌ならびに 「麻生路郎」 発刊記念句会

日時 九月七日(金) 午後六時
会場 金属会館

柳話
電話 271・3935番
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
中島生々庵
(今月の出題：板尾岳人)
兼題 「進む」「時計」「炎」「二卜筋」
席題 二題 当日発表
会費 三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川 柳 塔 社

11月の兼題 「黒板用」「据え置き」「逆コース」

募 集

十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選
水煙抄(10句) 川村 好郎 選
愛染帖(3句) 橘 高 薫 風 選
課題吟(各題5句以内)
「教育」 藤原 桜山 選
「皆勤」 川口 弘生 選
「霜」 藤井 明朗 選
★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選
水煙抄(10句) 川村 好郎 選
愛染帖(3句) 橘 高 薫 風 選
課題吟(各題5句以内)
「贈り物」 内海 幸生 選
「ツリ」 榎本 吐来 選
「年越し」 小西 無鬼 選
★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋を(使用)ください。

常任理事会は9月3日 5時から

川 柳 塔 社

(おことわり) 9月句会を急に、川柳全集②「麻生路郎」橘高薫風編・出版記念句会に変更しました。10月7日は二賞発表句会になり、11月7日句会ではおそそぎますので、この点ご諒承のほどを。
なお8月号予告の「黒板」・「据え置き」・「効用」・「逆コース」の兼題は十一月七日(水)の本社句会へ回わしました。

★(おねがい) 本社へのご送金に、銀行をご利用の方はご送金と共にハガキで、何月何日に何円送ったとお名前を書いてお知らせください。銀行から入金のお知らせなのでこちらから督促状をお送りすることもありません。よろしくご協力のほどを。

定価 四百円(送料29円)
半年分 二千五百円(送料共)
一年分 四千八百円(送料共)
昭和五十四年八月二十五日印刷
昭和五十四年九月一日発行
大阪市内南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼 中島 蓬太郎
発行人 藤原 童心
印刷所 藤原 童心
〒542 大阪市内南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社
電話 大阪・二七一・三三九八番
振替口座 大阪・三三三六八番
普通預金口座番号・一〇二七八三

・ペンペン草・

★「麻生路郎」橋高薫風編
★川柳全集④「麻生路郎」が構造社から出た。故路郎先生が一番可愛がっていた作家が薫風さんだった。また門下の中で一番先生を敬慕していたのも薫風さんだったとおもう。その薫風さんが「麻生路郎」を書いた。書くべく人が書いたということがある。
★「人物像」では、かなり大胆に書いている。しかし

カッケー 肉体疲労時の ビタミンB₁補給に アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA 25ミリ錠のほかに5ミリ錠



▼葉子コーナー

▼「ちんちろりん、リリー」に。虫合せととも、日一日とゆえわたる月。秋本番です。
▼駅には、ナシ狩り、イモ掘りなど、広告も新鮮な秋の味覚が香りを出して呼んでいるようです。
▼散歩道の桜の木にミノムシがぶら下がって風に揺れていました。せっかくなので作ったミノを人間は切り開いて財布などにするのと思うと寂しい風景でした。
▼虫時雨とともに、季節の秋も人生の秋も深まってゆくようです。

薫風さんだから、これが書けたのである。ぼくはこの「人物像」を高く評価したい。ここで筆を擱げんか、この書の血がなくなることになるからだ。
★薫風さんはよく先生に叱られたと書いている。それだけに先生は薫風さんが可愛かったのである。ぼくはただの一回も叱られたことがなかった。叱かれたらスグその場で辞めてい

くぼくを知っておられたからである。編集部入りした人たちが、出来た割りつけを先生に見てもらったと、どれもこれもアウトだったそうである。だから編集部員は「つかず・はなれず」の処生法をとったのだという。そんな先生だったが、ぼくの場合、勝手に原稿を集めて、そのまま印刷所へ原稿をほうりこみ、どんな本が出来てくるか、先生がご存知ないこともあったが、かげでどうも知らないが面と向かって一度も叱られたことがなかった。八年数か月、内弟子のような年数だった。ところがわけがあつて辞めることになったが、薫風さんがある月の常任理事会の席上で「一三夫さんが、最後まで残っていてくれたら、路郎先生はもう少し長生きが出来たかも知れないし、もっと楽な気持ちで養生出来たかも知れない」と、痛いところを衝かれたことがあった。ここいらにも薫風さんの師をおもう真情があふれている。
★薫風さんに出るだけお手伝いするつもりだった

が、あの頃、形水氏の句集「谷町」がおわって、すぐまた操子さんの「千亀利」をお預りしていたので、どうにも手が抜けず、薫風さんには今でも申しわけなくおもっている。
★句に一字の誤植もない。薫風さんだけでなく川柳塔の誇りである「麻生路郎」だと胸を張りたい。
★この本が出来る前から、表紙の文字は藍系統の色だと勝手に決めこんでいた。路郎先生は軸の表装などにも、よく藍系統の色を好んで使われていたからである。発行所が勝手に色を赤にしたのかと思っていた

ら、薫風さんが路郎先生の情熱をそのまま赤にしたという。
★とにかく良い本が出来ておめでとう。
額の子は誤字か？
★没食子・カネ女ご夫妻の句集「夫婦」は、今秋お目見得するが、口絵にした路郎先生の横顔「ひと掘り」がある。もうお気づきと思うが「ああ人生」が、「ああ人世」となっている。原句がどうあると、路郎先生の真筆だから活字説明も「人世」にしておいた。
(不二田一三夫)

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

大阪・なんば
東京・四
京都
高島屋



タッチでえらば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 IC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリ高級品

SANYO 三洋電機株式会社

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル **ホテルパシフィック**
政府登録国際観光旅館 **朝日**
勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 **中の島**
湯峰温泉——山のいて湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 **湯の峯荘**
和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 **萬波**

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 **鳴門**
政府登録国際観光旅館 **鳴門公園ホテル**
紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 **紀の川苑**
大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに
観光旅館 **淡の輪苑**
大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222



南海電鉄